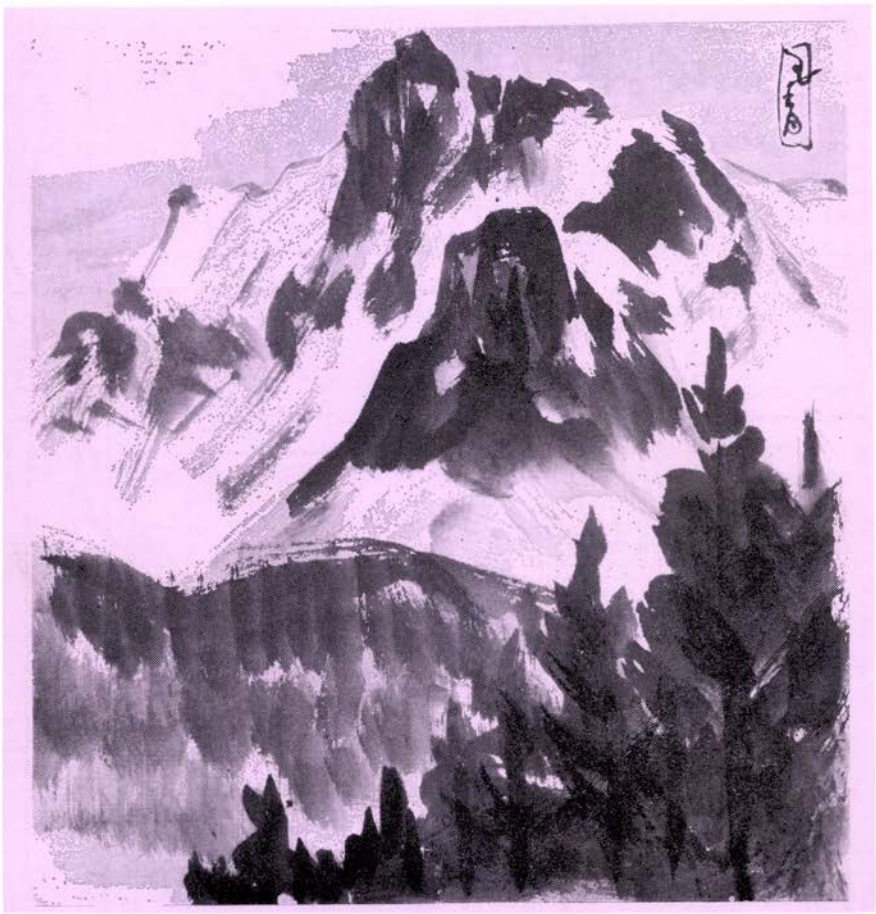
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十一年八月二十五日　印刷
昭和五十一年九月一日　発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五九二号



日川協加盟

No. 592

九　月　号

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四　条

高島屋

中島生々庵　共著
中島小石

句画集

生々庵

頒価　三千円　（送料二百円）

本社でお取次ぎいたします

南紀　和歌山　四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ　はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル　ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館　朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館　中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館　湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館　萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館　鳴門
政府登録国際観光旅館　鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館　紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに　ゴルフに
観光旅館　淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み■南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄

初盆会きうりもみが好きだった

人間ドック洗面具だけの個室の灯

人間ドック訊問される既往症

人間ドック半信半疑に横たわり

人間ドック病人のポーズ整わず

中島生々庵

ドック入り

部屋から出る時は指定のガウンをはおり、スリッパ姿。室内からは鍵がかからぬ仕掛のドア。ノックと同時に突然係りの人が現われる。朝6時、身辺を整えていると、今日は正午まで絶食とのご指示。先ず8時に血圧測定、採血、採尿、それからブドウ糖を飲まされる。キッチリ1時間毎に又現われて血圧、採血、採尿。やがて5階の室から2階と地階に運ばれ、心電図と胸部レントゲン撮影。少々疲れて室に戻ると昼食が用意されている。独居とはいうものの、バスもトイレもテレビも一流ホテルなみ。小菅の拘置所とはちと違い、六甲山麓の眺望絶佳、閑静清澄、ここは天下の香雪記念病院。友人や家族がしきりにすすめるので糖尿病の疑を解明するためのドック入りである。お蔭で日頃の疲れはとりもどせたし、糖尿の疑も検査の結果が明るい。しかし今までのように大食や、お酒の後のぜんざい、羊かん等は禁ぜられた。今暫らく命が惜しい。病院の指示にはけなげにも従うつもり。

川柳塔九月号

座右の句

阿呆なこと云うてしもうて淋しけれ　（豆秋）

私の句

鉄橋に夕日　倖せまだ遠い　谷垣史好

川柳塔　九月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

ドック入り……中島生々庵…（1）
相似……正本水客…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（十二）……（24）
　清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
　鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……若本多久志選…（4）
水煙抄……川村好郎選…（30）
麻生路郎物語……（21）……東野大八…（21）
秀句鑑賞……（同人吟）……尼緑之助…（28）
　（水煙抄）……香川酔々…（29）
近作……諸家…（45）
百人一首と川柳……（27）……富士野鞍馬…（38）
愛染帖……正本水客選…（40）
51年度二賞中間発表……（26）

相似

正本水客

老梅の命のかぎり咲いて見せ

川柳塔49年6月号に発表した句であり、去年3月号の目次下「峰寺」では句の生れた情況描写をしている。

処が新宮の〝みかん〟43号に

老梅のいのちの限り咲いて見せ　福水

が発表され、酔々さんの秀句鑑賞が次号に取り上げたので、一、二の人からの注意が私の耳に這入ってきた。福水さんとは面識がないので作句の動機などを句主に聞いてみて欲しいと主宰の十郎さんに頼んだところ、福水さんは家を改築する間の仮住居を見に行った際鉢植えの老梅が美事な花をつけているのを見て吾が身にたとえて詠んだものだという返事が届いた。

同想の句、同じ表現の句の隅然の一致というのは屢々耳にするが、この句のように実際に見なければ創れない性質の句で、命といの

高橋操子句碑建立……（54）
川柳ロッキード事件……（42）
薫風・鬼遊・甲吉・古方・緑之助・千楢・柳志・阿茶・
酔々・静馬・庸佑・可動・漫柳・一三夫
一分間の柳論……西　いわを（49）
空はつづく……吉田水車（37）
初歩教室……本田恵二朗（48）
大萬川柳「強引」……川村好郎選（50）
柳界展望……（52）
雅号ぷっちゃけばなし……松下梁水（63）
本社八月句会……（庸佑・整理）（55）
各地柳壇（佳句地10選）……川口弘生選（61）
「握りめし」……槙田英詩選（46）
一路集「備　え」……宮尾あいき選（46）
「空の旅」……小川恒明選（47）
編集後記……（一三夫・葉子）（65）

座右の句

しあわせな家　年寄りがよく笑い　（春　巣）

私の句

もう孫の昔語りとなる市電　斎藤三十四

ち、かぎりと限りと、漢字と仮名が違うだけと云うのは稀であろう。幹の片側は殆ど皮ばかりとなった老梅が美事に紅の花を咲かせている情景は〝命のかぎり〟とより表現の仕方がないと、いささか自負めいたものがあったが、同じ表現の出来る情操を持つ人が存在することは嬉しいことでもあり、同時に私自身独自の句境を生み出す努力のいよいよ必要なことを痛感させられた。

相似は反省を生む。

○

昭和もまだ一と桁の頃、外地派遣中に亡くなった係のO君の弔慰金を持って東海道線のY駅へ行ったことがあった。田圃のなかを3キロ余り、漸く目的の家を尋ね当てると、出て年られた年輩の人が父上だとは直ぐに分った。まことに申訳けなく不謹慎なことだが、父上の顔がO君のそれを少し引伸した感じで顔の円さ、頭の毛の生え具合、目鼻口の並び方など、全くそのものなのである。厳粛なお悔みを述べながら、私は湧き上ってくる笑いを何とか堪えようと必死になっていた。こんな苦しい笑いは無かったと今でも思い出す。

相似は笑いを生む。

若本多久志選

告白をすれば人生変わるかも
平和だから駈け落ちぐらいしてみたし
川枯れて貧しきものを見てしまう
恐ろしいもののひとつに無関心
恋終るつくつくぼうし鳴いていた
大ジョッキ今日一日を忘れんか

竹原市　小島蘭幸

制服を着ると掟が纏いつく
さり気なく部長を勝たす石を打つ
いいアイディアが出る角瓶を傾ける
一つだけ鳴る鈴がある母子家庭
移り香に男の罪が匂うなり
大ジョッキ飲み干す今日に悔はなし

神戸市　小浜牧人

其の他大勢乗せて始発のベルが鳴る
七人の敵へ女も眉を引く
健康法それぞれ違う本を読み

大阪市　本多柳志

薬師寺落慶法要
月光菩薩さまも嬉しい腰の線
塔の跡の土白鳳の音で踏み
写経してわが仏心を悟らされ

倉敷市　水粉千翁

茶に坐り悟りに遠きものばかり
片隅の広さをさだめとは云わず
泣いている笑うてもいるおもしろさ
茶にしみる筧の音のはげしかり
捨てられて拾われる手にすがるまい

藤井寺市　西いわを

アロハ着て白髪頭は若返る
若い娘の浴衣姿は突っぱって
切られても蚯蚓は土を離れない
唐衣を思わすように燕子花
十界に住んで人間つよく生き
路を聞くだけにも人を選り好み

大阪市　小出智子

プラットホームの真中にある旅ごころ
恋をしたむかしのままの夏の雲
日曜はおもい思いのまま昏れる
眼鏡換えて確めてみる子との距離

富田林市　板尾岳人

遺書をかく筆を洗いに黒部川
黒部川水の原色われ見たり
山の峰暮れても黒部起きていた
太陽の昇るを知らぬ黒部川
吊り橋の下で黒部は死を待てり

貝塚市　野坂つき子

頼りない男が杖を探してる
花胸につけて紳士の顔にする
仲直りするテーブルに花を置き
満月に女の願い小さすぎ
姫だるま寂しい女に話しかけ

八尾市　香川酔々

浩然の気哲学の道歩く
過去未来その真中で本を読み
大空を馳ける日を待つ燕の子
狭き門くぐりて蝶の翅の艶
格言のこれから先のあてはずれ

富田林市　和田維久子

眼病にて
愚かなる雑念点眼の手がふるう

一眼二足無為無策の星ながむ
病める日は美も醜もなく百合匂う
価千金一行の墨うすくとも
悲しみのやわらぎ決まる心あり

大阪市　不二田一三夫

一人だけ云う真実は無視される
春宵一刻そんなページは白のまま
バースデーお祝い貰ってから気づく
宗右衛門町恋の仕掛けがあるマッチ
宗右衛門町踊りを知らぬ足袋が行く

宝塚市　傍島静馬

もう年や女に興味ないと嘘
満員にスリも押されているしぐさ
倦怠期これが女神に見えた妻
掃除しにくいものの一つにお仏壇
たい焼の隣でたこ焼苦戦気味

島根県　堀江芳子

睦まじい箸の動きをにらむ鯛
親のあるうちにと想う悔ばかり
酒の燗いそいそ妻に甘んじる
布団乾してゆうべの夢もふくらんだ
ゆとり持つ団扇素直な風がくる

大阪市　本間満津子

思い出の街今の風今を吹く
古道具みな捨て難い過去をもち

あちら風に息子よ婚約おめでとう
健康を得て遺言書を書き直し
帰らずの旅の晴着に御印受け

三重県　川上大輪

裸一貫男に出発点がある
炎天の午後の時計は重くなる
先頭が曲れば曲る列にいる
曲り角の女を騙す道しるべ
波の私語岩は聞き役ばかりなり

西宮市　島居百酒

父の日の膳が入歯を喜ばし
観終った旅の無聊へ鳶嗤う
ポン引に寄られてロマンの夢破れ（ニースにて）
映画祭俺には無縁の人の波（カンヌにて）
賭ける気はないがカジノを観て廻り（モンテカルロにて）

和歌山市　野村太茂津

故郷の砂浜に病後を養う

ふるさとの砂浜昔の恋が埋めてある
砂浜の四季うたかたのよう滲み出る
砂握る人間裁く音が洩れ
まざまざと昔のためいき聞く砂で
砂に立つ心に叶う夕凪で

八尾市　宮西弥生

お二階の出る幕がないもとのさや
母のシワ千の乱れに耐えたあと
色のない風で女をだませない
ぎりぎりのくらしを知らぬ遠花火
たわむれに生きまい片道切符買う

岡山県　嘉数千代香

稲がささやく稲のことばが聞えてくる
健康を味方に貧に挑戦す
果てしなき希望を雲に泳がせる
節くれて日焼けて亡母の指となる
限界へ祈る十指をもっている

和歌山市　垂井千寿子

ショック聞かさず母は庇われる
見られてる意識金魚にある驕り
齢に服　合わさず服に齢合わす
電話口やっぱり裸恥かしい
派手な服わが心にも着せたい日

桜井市　岩本雀踊子

日銭の重さが汗にぬれている
涙腺の弱い女のもらい泣き
斗病の長さに見舞のない孤独
ふとゼニの強さを知った不仕合せ
小ゼニで払うとおいしいコップ酒

兵庫県　遠山可住

この辺で中断　西瓜が冷えている
沛然と雨　人間を一人にす
一日のはかない花がきれいすぎ

虫が好かぬそんな理由が言えなくて
山椒煮る香りあしたを思いつく

大阪市　中川滋雀

草臥れが行衣に染みる帰路の雨
お山を下りるとさもしい世にまみれ
断片をつなぐと偽善の顔になり
運命線手相の当った路に堕ち
やけ酒は馬の話題で馬が合い

八尾市　大路美幸

八月の恨みを託すきのこ雲
夕焼けを味方に孤独の大ジョッキ
傷ついて亡母のことばが欲しくなる
倖せを摑む指間を風抜ける
倦怠のグラスの底が乾いてる

平田市　久家代仕男

折に触れ妻が無慈を歯痒がり
都市で身につけたふたつの顔をもち
骨肉の愛　ともすれば近視めく
筋論で押せば人間味が薄れ
近所からおもろい夫婦にされ平和

島根県　錦織文子

砂の呼吸この手で足で確かめる
乾かない言葉探がして二人住む
あじさいのその清純さが眩しくて
足袋を脱ぎ指輪をぬいて女無心
縫いあげた甚平へ〇才の盛夏を待ち

守口市　野呂右近

折返し無し七月の朝を出る
コインロッカー罪も涙も詰めてある
地下足袋の男小石をけって歌
親孝行望むは人間だけらしい
雑草でよいと思ったり悔んだり

大阪市　河野君子

老父危篤を脱して（三句）

梅雨冷えの老母に看護の炎見る
天国から確かに戻った父の欲
病歴を重ね老父は子に還り
罵倒して心の在りか確かめる
自分を許してからの自分に怖くなる

松江市　岡崎祥月

売らんかな財布はそっぽ向いている
給水をのがれる雨のドレミファソ
退職金気がへるように日々削れ
嘱託のくらしにねじがかからない
崩れゆく心に愛のむちを打つ

東大阪市　竹中綾女

花壇行く二人へ蝶が先に立ち
身勝手な願いと思う神の前
喧嘩して負けた男の捨てぜりふ
紫の睡蓮平安美人偲ばせる

拾い石あの旅此の旅思い出が

鳥取市　両川洋々

人生の誤算へ不測の汗を拭く
男にはなれぬ日二合の酒で酔い
伸びる芽をああ両親のエゴが摘み
男の稼ぎ鼻で笑って一人住み
夕立ちへ砂丘ひと息入れて暮れ

東広島市　高橋鬼焼

スランプの靴をみがいて妻の幸
八月の陽へ真白いシャツを着る
たい焼の夢を真赤な海が待つ
天よ地よ静かな祈り原爆忌
針山に妻と働く針がある

竹原市　森井菁居

サックスもむせぶビールが苦い夜
詩心ふと星まばたいたように見え
ペンネームの一字に若き日のロマン
凡人のエゴを噛うて海が凪ぐ
時代感覚買われてのマネージャー

松原市　玉置重人

禁煙の鼻へ隣の紫煙来る
手の切れる札は他人のような顔
ふところを読まれたらしい口車
星空に明日の希望を飲むジョッキ
大ジョッキ女楽しい民主々義

大阪市　宮尾あいき

咲き初めた朝顔朝を早くする
おとぼけの術で母子の和を保つ
こんな時飲めたらなあと思う酒
一人でジュース飲んで話の外にいる
物干に登れば大きな空がある

出雲市　原独仙

銀鱗の躍る川あり故郷を恋う
取急ぎ要用のみの父の文
のんびりと伏せてて牛の尾は多忙
老夫婦平均寿命の列に伍し
師を偲ぶ柳話に過去が蘇えり

竹原市　山内静水

あじさいの私語に六十まどわされ
買い込んだ土産がたりぬ旅がえり
ああ古巣はだか踊りを所望され
夫婦相和して煙草も酒ものみ
にら味噌の母の匂いもしてまろし

西宮市　藤村〆女

頭打ちそうな軒明治の匂い持つ
人妻を想い続けてまだ独身
まだ独身かと一言憎い人
罪深い心に憩の灯をともす
見送ってあとの空虚に焦れてくる

大阪市　西出一栄

父の日を父てれくさし子に酌がれ
あじさいの多情が梅雨を憂しとせず
公園の芙蓉紅一点の顔で咲く
月見草今宵はどの星選ぶやら
水色のしごきにおんなの香をみつけ

呉市　槇田英詩

雲悠久流れているは人の方
人悲し法に縛られ法に生き
合掌の真意石仏お見通し
事故現場石の地蔵が一つ増え
お隣りに遠い幸せ噂となる

大阪市　金井文秋

一筋の道を凡人外れたがる
あじさいのこれが最後の彩となる
胸張っていても傘寿の背が丸し
坊主まで長髪仏浮ばれぬ
誘惑の魔手がやり手のすぐ傍に

岡山県　竹内翁童

底辺に生きて夢は小さなものになり
金婚だよと妻の墓に語りかけ
激流にいどむ若あゆあかずみる
商談がまとまりドッと酔うてくる
原点にかえる日曜寝て暮らす

岡山県　白岩文衛

紫陽花のいくたび想い変えたとて
紫陽花のうつろう彩を持つおんな
紫陽花の雫に染まる深呼吸
ここからはひとり行く道父と子の
子を思うこころの果ての石を積む

富田林市　岩田美代

すっかりと花を落して新芽のもだえ
遠い日の如く綿菓子なめてみる
木綿風呂敷褪せた歳月ふと思う
榊組む慣れた男の細い指

大阪市　天正千梢

石浮いて木の葉の沈む世を迷い
悟りに遠くやや落着をつかみかけ
貧弱なほめ言葉でくすぐられ
大きな喜びに小さい声で泣く

青森市　工藤甲吉

仏心は光る一木一草に
乱丁も落丁も人なればなり
高級車の前を汲取車が走る
御香典にも魂胆は秘められる

大阪市　江城修史

水引のかかる浮世の義理を下げ
絆と言う鎖が重い老いの坂
亡父の声聞きたく海鳴り聞きに行く
身構える暮し抜け道ない夫婦

八尾市　高杉鬼遊

算盤の珠の一つにある生活
桜桃忌死を共にする人やある
教会の椅子で汚れた胃を洗う
週刊誌おとなに夢のない生活

島根県　堀江正朗

耳だけで生きて嬉しい事も聞き
おじいちゃんになる日数える指を折り
神様に合わす掌を持つ果報者
ゆっくりとゆっくりと箸　膳の鯛

岡山市　川端柳子

折返し封書うれしい梅雨ごもり
孫の写真淋しがりやのわたしをみる
表情の豊かさ飾っている涙
若返えるゆとり持ちたく髪染めず

大阪市　吉田圭井堂

ためらえばつけ込んで来る人の運
磨き上げて只で帰さぬ下足番
意気込みは大物だったが雑魚ばかり
憂国の士は庶民です庶民です

香川県　三井酔夢

長良川対岸にみる慕情の灯
ショーとして鵜匠きびしき眼をもたず
篝火を一期と思う鵜もあろう
なみだ壷盗むあなたを泣くために

松江市　恒松叮紅

文化財となって神話が生きている
城下町擬宝珠は昔のままの艶
一晩の温泉薬効聞いただけ
録音に歯切れの悪い出雲弁

今治市　原田一風

ぼんぼんの博打で老舗一つ消え
わたしが男ならと夫を馬鹿にして
アルミ鑵捨てた昏覚えてる
喫茶店男が漫画読むところ

高槻市　福田丁路

精魂をこめた胡瓜が臍を曲げ
鍬を振る汗が滴り土が肥え
太陽の恵みに踊る葱坊主
信仰の心が燃える杉並木

東京都　山根白星

倒産のビル屋上に朱の鳥居
種なしと言う果物の意に叛き
ネクタイ売場では似合っていたつもり
外濠の秘書を籠絡して埋める

豊中市　戸田古方

生かされたいのちや今日も跳び起きた
臭いせぬトイレが少し物足らず
澄んでいるから綺麗な水ときめている
奇蹟みなお伽話と信じきり

高槻市　若柳潮花

食通が器用に鮎の骨を抜き
妻へする感謝心の手を合わせ
黒ユリの喪に似て憂い含む色
燃えもせず潤いもせぬ瞳が黒い

尼崎市　黒川紫香

芽を出した種に命を教えられ
虫歯押えて無言の列に居る
紫陽花の生き生きとして梅雨残る
ガム噛んで噛んでドライブ又楽し

東大阪市　落合思月

ベコニアが女の城の御留守番
この上の自由を叫ぶ赤い旗
想い出となればたのしくなつかしい
尺取りのまねも出来ない平社員

松江市　柳楽鶴丸

多産系の妻に不満な子が二人
シーメンス事件「歴史は繰り返す」
昭和の神話ピーナツが金になり
拳骨の中で怒りが燃えている

倉敷市　野田素身郎

上役との議論に勝って落ちつかず
四畳半の書斎裸で読んでいる
怒号罵声に耐えてる管理職手当
飲む話もうネクタイをゆるめてる

橿原市　岩井本蔭棒

断崖をみんな見上げる遊覧船
掻き分けて巡査が走る夏祭り
灰になる時も電気の世話になり
くくられた柿の木撫でている帰省

堺市　高橋千万子

そっと噛む小猫よ愛のしるしかな
美しいダイヤ秋刀魚をより分ける
その人に一ぺん逢う許す腹
この人の憂いに翡翠よく似合う

倉敷市　稲田豊作

責任は持たぬ親切撒いている
火葬場で慾を焼かれたエゴイスト
しっかりしてよと良人の力しぼり出す
酔うて寝て明日のゼンマイ巻く新

愛媛県　渡辺暁童

古稀という駅へやれ来たそれついた
まだ水に昔があった島四国（へんろ市）
又来ます又の日はいつ島送る
鎌倉と金沢くらい見て死のう

鳥取市　河村日満

葦に似た姿で今日も立つ首相
老いて子に従うわたしではないぞ
金婚を祝うきれいな言葉撰る
六十の垢温泉で殺ぎ落とす

氷見市　関美子

昇進のレール油が敷いてある
口八丁くしゃみに先きをこされたり
巣立たせて女の三十八度線
ハッピーバースデー指にダイヤはないけれど

米子市　林　瑞枝

知恵も背も母を小さく見せて伸び
忍者めく猫は通路もなく入り
お早ようの先手心の戸を開く
太陽へ寝床を見せぬ二人三脚

八尾市　高橋夕花

梅漬けて母よりすこしゆとりもつ
自画像にすこしきれいな嘘を塗る
躊躇するわたしを刻が捨ててゆく
歳月をひたすら歩む思慕のみち

倉敷市　田垣方大

耐え難い残暑桔梗は涼しそう
朝市はごったかえして生きている
貝殻を拾えば波がついてくる
余生まだ波打際を歩くよう

岡山県　直原七面山

行く末は大臣になる子を背負い
俺に似よ俺に似るなと梯子酒
子ら皆んな味方に妻は強き者
出もどりの娘へ父の優しい目

大阪市　山川阿茶

老いらくの養老院の恋の花
ピリオドを何処で打ちましょこのあたり
七夕の金釘流の天の川
冷血か風邪をひいても熱も出ず

神戸市　仲　どんたく

棺の母あんじょう焼いてや云うてはる
ゴルフ場が近いお墓やから参り
ハンバーグ　クリーム　アメリカ帰日談
課長昇格ゴルフの手並みテストされ

鳥取県　林　露杖

満四十年間の職を去る
今日会社辞めると妻に告げて出る
名分をただして無職の身に還り
今日からはタイムカードのない自由
人情の稀薄別離の眼が外れる

大田市　藤田軒太楼

荒海へ暮し支える櫓が軋む
捨て石に甘んじ渦中に耐えている
連峰の緑に抱かれ村平和
一泊を強いられ里の愚痴を聞く

大阪市　川口弘生

下り坂の一日だけど石を積む
ヤドカリでないと気付いて蓋をしめ
放し飼いにされて自分で檻つくる
あわれ知る女で長い髪をもつ

夏枯れへ賓客のごとく扱われ
酒の座の話は頷くだけとする
銀婚へ来て二人だけの言葉もつ
限界を知るとき舗道を歩くだけ

松江市　小林孤呂二

真打ちが持てば扇子がしゃべり出す
団結の強さを小さい蟻に見る
頂上が見えて苛立つ老いの坂
生き恥をさらして高官野に下る

東大阪市　竹中肖二

注ぎ合って父子に断絶ないビール
ブレーキをかけられて出る朝の靴
対局の空気ふるわす石の音
明日へかける女引金もって居る

大阪市　黒田真砂

さわやかな風がワルツの音を立て
旅たのし乗り合う人に手相見せ
掛け声を暮らしに入れる一、二、三
気取らずに帽子かぶるも夏なるか

今治市　越智一水

定年も失業もない職に生き
身の上話それから女気を許し
真実か演技か女炎えている
ナポレオンは飾って人に見せるだけ

岡山県　横山一声

防犯のビラ撒く保護司初仕事
生かされるお礼に生きるお手伝い
三面鏡からはみ出した生きる嘘
儲けにはならない趣味に支えられ

松江市　中川晃男

紫陽花の燃える彩なきままに濡れ
生々流転水が水打つ滝の虹
体臭もなく人形の衣替え
貧しさに慣れて恐いものがなし

竹原市　三宅不朽

愛嬌と礼儀も知って娘の育ち
立ち寄りしペンフレンドの男振り
日の丸を仰げば折目があるニホン
もっともっと耐えた人から励まされ

新宮市　大矢十郎

義仲寺にて
蕉翁の碑に来て蟬の誇らしげ
欲の無い顔やと知ってる鈴の音
木石として朝の鯉に餌を投げる
ニュース解説へ見付からぬ世界地図

京都市　松川杜的

騙されてもだまされても騙す気になれず
糊つけてある封筒にのりがいり
つつましく咲くつゆ草の朝の幸

松山市　谷のぶお

眼を病むか心を病むかサングラス

愛媛県　村上旭童

やる事は有るが半日釣りと決め
かまきり一匹父さんが起こされる
少年の目には真直な道に見え
冷房がこたえますとはぜいたくな

泉大津市　村上春巳

老人に立たれ善意の席と知り
大都会立喰いそばで昼を継ぎ
停年へどうしょうもない持ち時間
日曜の朝ほど雀が早く来る

姫路市　梅谿庵不酔

先妻がきまり悪そうにする焼香
冗談にしても臓腑にようこたえ
定退の覚悟してたがさてその日
紙ぎれが一枚僕を停車させ

東大阪市　本多清人

冷蔵庫開ける回数増えて夏
若者の向学心へ拍手する
きっぱりと断わり私の道をゆく
温室で根性のない花育つ

京都市　都倉求芽

あじさいが淋しくなれば雨を呼び
肩書がひとり歩き出す判を捺す
やり遂げた満足感の顎の汗
夕立と風鈴真夏へ握手する

岡山県　出原敬一

罐ビール位置も心中記録され
童名へおんな迎え火ひそと焚く
飲んで寝る外なし駈込寺なくて
鬼刑事覚えある瞳に背を射られ

大阪市　柳原静香

善人の足音鳩は知っている
長髪をきっぱりと切る子の決意
へそくりの目減り小さな夢萎む
禁煙を誰も気付いてはくれず

大阪市　西川誓二

年老いて益々月日の気忙しさ
金の魔力に演出された悲劇
親の掌からこぼれ落ちた少年A

矢田寺を訪れて

夫随してあじさい寺へ杖をひき

宝塚市　小畠無聖

まぼろしの亡妻の声きく香を燻き
十三忌やもめを守る花飾る
来世はもいちど夫婦と持つ念珠
花菖蒲深窓の佳人立っている

枚方市　宮川珠笑

潮の香をバッグに満たし避暑地去る
招かざる客へも金魚踊ってる

インフレへ晴耕雨読云うとれず
青芦に抱かれ朽舟眠ってる

大阪市　神夏磯道子

横文字で親を押える腥かじり
ぬか漬けにカビ生えている妻の留守
利用価値残ってるらしい誘い来る
電化した部屋で風鈴静かなり

和歌山市　若宮武雄

高層ビルの下に苦しい土がある
四捨五入の四の運命を脱けきれず
職人の鼻唄うまく出来たらし
観音の胸のあたりの亡母恋し

守口市　村田瓢太

喋べるのは建前　本音は別に持ち
舗装拡がり地球の表皮死んでゆく
新聞記者聞いてたような嘘も書き
お社のぐるりをビルが取り囲み

和歌山市　吉野富子

薫風の窓に思案の資金繰り
忍従の性貧乏に強い母
充実の日々明日などは考えず
盆栽に心奪われ詠めぬ詩

島根県　小砂白汀

ときめきを忘れた独楽のよろめきか
コップ一つ伏せたまんまで妻の留守
草笛にわが少年の日が戻り
ライオンズクラブの傘にも骨がある

米子市　増田竹馬

赤銅色の裸漁師のユニホーム
金魚鉢マキシと行き交うパンタロン
夕焼が明日を請け合う色に染め
尻ポまで良心的と云うアンコ

美称市　安平次弘道

花言葉彼に届かぬ片思い
自宅まで名刺に入れて小役人
妻太る女王蜂に似て太る
匿名の善意へマスコミのおせっかい

宇部市　平田実男

ホイホイと云うほどゴキブリ捕われず
割勘の時はこんなに飲める酒
小さくなるほどに偉大さ解る母
同輩の病死の話へしーんとする

大阪市　藤田頂留子

ジーンズも浴衣へ変身祭りの灯
肩入れる御輿に氏子の連帯感
青葉にも老少不定という落葉
串かつも女上位の飲みっぷり

岸和田市　葛城伊三郎

はね釣瓶紀洲茶粥の美味い家
山里の遍路急がす黒い雲

一筋の道でよかった俺の過去
石碑に母を叫べば風の音

守口市　羽原静歩

初孫を抱くこわれそうに抱く
より添うて真実一路の旅が好き
人間もイージーメードへ堕ちていく
ロッキード時の流れに裁かれる

倉吉市　奥谷弘朗

指先で舞台をしめる芸の冴え
雲の峰登れば登るほど遠し
さりげない所作に人柄にじませる
菊鉢に心機一転茄子を植え

倉敷市　小幡里風

紫陽花の何か媚びてる雨に咲き
吾が道を行くデコボコの坂続く
妻と嫁とのハミング台所から流れ
忍という字を噛みしめて耐えている

大阪市　河井庸佑

昇進へ何かが動いたという噂
馬を見て鹿と言わせる力見せ
ぴんぴんと答が返る心地よさ
打てば響く男とやっとめぐり会い

和歌山市　内芝としよ

寄席に行く祖父は楽しい顔となる
娘の電話いつもはずんで母の幸

欲のない顔でのんびり平社員
摑もうと焦れば鰻の護身術

和泉市　西岡洛酔

女坂登りつめても紅を引く
几帳面の歩幅に今朝も三輛目
美しい嘘をバックに夢を追い
老いの背を押しのけ世の波通り抜け

鳥取県　鈴木村諷子

みの虫ののぞけは外は春だった
小便をここにもしとく犬の旅
松の葉も二本繋るああ神秘
右の町ひだりの村の一河の情

竹原市　時広一路

美しく咲いて季節を気にしない
マンネリの壁へ小さな穴を開け
一息にグラスを干して女なり
悠然と見下ろす雲に夏の貌

藤井寺市　児島与呂志

嫁きおくれ気になる嘘の無い青春
子を持たぬ無口な夫婦に嘘がない
しらん顔してても母の目騙されず
内職の老眼鏡がずれている

諫早市　原田明春

思い出の女はいつでも惚れており
父ちゃんの寿命保険屋がきめて去に

人情を掛ければ話題となる長屋
やめさすかやめるかの席守り抜き

香川県　岡田拳法

猟犬色めけどひっそり古狸
本音うとましく立前あほらしい
利用される位置に馬鹿正直がいる
いつからか参加に意義を求め老ゆ

倉敷市　藤井春日

肝心なところでポケットベルが鳴り
お大事にと薬局一と言つけ加え
当世に見捨てられてる百度石
洗い髪女の素肌が燃えている

大阪市　室谷徹舟

二人だけの娘を全部嫁がす
娘の顔をまともに見ずに式終る
二人共嫁して淋しさ押えてる
倖せになってくれよと除籍する
倖せな苦労をみてる親心

鳥取県　清水一保

人間のわがまま蛍だけを責め
朝露を踏めば生気も地にこぼれ
積乱雲空の怒りに似てけわし
自由と平和求めて地球今日も飛び

伊丹市　樫谷漫柳

風邪に寝て読みし句集に脈を知る
父の日のネクタイ息子を見直さす
あばれても梅雨にはやっぱり後があり
褒賞が傘寿の父に華を添え

生駒市　草深酔升

ロッキードわけの分らぬ腹が立ち
捨て切れぬ野心枯淡に遊ばせず
行くあては無いけど天気気にかかり
ハンドルを握って余生まだ元気

和歌山市　沢山福水

静と動所詮妥協の出来ぬたち
ありがとうその一と言で気が和み
石段を見上げて老父思案する
夏の陽が迎えて呉れた無人駅

貝塚市　行天千代

無言の行　我等只今冷戦中
二ヵ月でもう嫁の愚痴聞こうとは
金出して使いも当るあみだくじ
焦げた鍋やっと磨いて心満つ

滋賀県　溝口はやを

なんきんが薄の中で肥えてゆき
欲のない男に女すがりよる
くず豆を散らした土に芽がはえる

島根県　太田亀甲

無報酬二十五年の役終る
面会謝絶とうとう見舞に行きはぐれ

旅行プラン年金さがってからの事

和歌山市　津田与史

熱帯魚思春期らしい動きする
幾曲りしてもう曲る角がない
顔に自信あるらし女胸を張る

鳥取市　大塚豊生

アルバムの巻頭飾る児の産湯
ハネムーン窓越しにするVサイン
朱竹画く指しなやかに喜寿近し

名古屋市　吉田水車

神宮徴古館
徴古館出れば二十世紀の青葉
割箸で指すもあわれや壇の浦
仲居さん端然として飲みたまい

大和郡山市　森田カズエ

素顔向き合うて夫婦にながい夜
蔓蔓の伸び目測の通勤路
噴死したように蛙の交通禍

仙台市　川村映輝

失業者一〇〇万繁昌するパチンコ屋
赤旗の援助をうけて社をつぶし
汗の無い人生もろく崩れさり

西宮市　若林草右

白蟻の広告その電柱も虫が食い
インタールーム金星いとめた乱れ髪
要談らしい椅子引きよせた低い声

兵庫県　大江秋月

仕合わせは野良で涼しい風と合い
田の草とり暑いが欲と二人連れ
つるはしに男の汗がしみる音

笠岡市　松本忠三

もう少しで終るというにご飯です
生臭さ抜けて僧侶の兼務職
食べさせてやりなと医者に見放なされ

玉野市　小谷仙山

男一匹腰の手拭汗臭い
野良猫のくせに可愛い子が二つ
欲捨てろ捨てろと壺に教えられ

兵庫県　河原みのる

篠山を通せば本場の猪で売れ
生きた牛麦の穂知らぬ農家の子
とまる虫捕らぬ飛燕に誇りあり

羽曳野市　塩満敏

揚雲雀制空権を主張する
サービスのシブキをあびて河下る
ぜいたくな悩みか蛙の大合唱

大東市　土岐トク子

婿香港へ
うれしさをかくし切れない婿のみやげ
手みやげはメイド・イン・イングランドのコンパクト

招かざる客恍惚がノックする

小松市　馬場魚山

本祭り裏通りにも人通り
自由にお取り下さいと言い買わせる気
アルミ貨をスーパー用に除けておき

大阪市　神谷凡九郎

本当の僕を話して呉れないか
聞こえない笑いで耳がせめられる
人間嫌いデモ人間として生きる

唐津市　新岡回天子

目前の馳走割篤われぬなり
定年も近く事なかれ主義となり
未亡人男の智慧がいる今宵

大阪市　神田秀峰

茶柱へ昭和三世も大騒ぎ
秋夜長深夜もチャンネル廻す音
唇を頂くまでの四苦八苦

堺市　伏見茂美（転居して）

ふりだしの近所づきあい気が疲れ
ハイミスの誰に見せるか夏化粧
にじみ出るもの無い女の派手好み

八尾市　内海幸生

父へ血を貰う加害者さえ拝み
目で縋る父を仕事が引き離す
年頃が子に似て轢き逃げ責めにくし

若鮎のすむ故郷の川汚すまい

鳥取市　佐々木静泉

二た昔前の自分もこうだった
とりどころない恋心が放浪する

大阪市　津守柳信

尽くされて返えせぬ愛もあるルール
つき添いに馴れて夜明けの美を賛じ
レース編み優雅に見える自己逃避

京都市　山本規一朗

過去消して夢の灯燃やし一人居る
虎の子が少さくなりゆく通帳見る
パンフレット集めて今年も旅消える

大阪市　大坂形水

デパートで酸素不足のよう疲れ
はしゃいでいる大臣は憎めない
傷つけているとも知らぬ幸福者
零細者救済ボスの意見きく

正本水客

埴輪の手　天を指したいのかも知れず
軽い疲れのとれないままに返事書く
らせん階段　都会の底を見せられる
雨の川を背に椎茸を売る老婆佇つ
落語界の玉三郎と悪びれず

橘高薫風

童唄生別死別異らず
チューリップ胡蝶の奈落かも知れず
緑陰におならしそうな羅漢さん
鵜もやがて切り絵の闇に紛れたり
酔眼に鵜綱の張りの十二筋

川村好郎

住みつけどなお他所者の夏祭
月光に濡れて心は無にならず
汗をする日毎老いにはさからえず
このように裸になれと石地蔵
（せせらぎ社句会）
玉島のここにも育つ柳の芽

西尾栞

寄せ書の夏山句信賑やかに
蟬々を捕らして下さい又も来る
じっとしてやと頬っぺの蚊を打たれ
ＯＬ貴族というクーラーの部屋である
姉弟も二人となりし墓参り

菊沢小松園

草書では判らず行書で物足らず
津軽三味男の涙叩きつけ
不機嫌へねこ猫なりに気をつかい
それとなく花道らしいものをつけ
定年までもういくつ押すめくら判
ひび入りの茶碗にも似て今日も生き
老化とは詮なき言葉　だが寂し
古疵に触れた思いでページ閉ず
無に還るそんな言葉がわかりわけ
風葬にして欲しいなと思う日も

若本多久志

新緑に圧倒されてバス廻わる
少女笑いころげてあたたかくなる
シンボルの古城をビルが取り囲み
淡路島航路
赤汐の汚れ神々の路なりし
汐渦を巻いて架橋を待つ鳴門

尼緑之助

夏もよし木蔭に風のある限り
なんべんも聞いた話をまたしゃべり
禁煙をして禁煙をすすめたり
禁煙の話にあまり乗って来ず
老人のひがみ心臓までひびき

浜田久米雄

富士の火口眼下に眺めジェット音
機上食が眠けを誘う雲の波
アローハーみどりの風に迎えられ
真珠湾思い出すまい真珠湾
たたずめば匂う花あり戦士の墓

本田恵二朗

麻生路郎物語

—蒙彊北支の旅—

（21）

東野大八

（小川静観堂氏から—岩崎柳路氏は戦後伊丹へ帰り死亡、私が主治医でした。路郎先生にお目にかかったのは張家口の柳路氏方と北満ハイラルでした。—写真は路郎先生と静観堂氏—編集部）

昭和十三年九月十八日神戸から黒竜丸で路郎は北支蒙彊の旅に上っている。この頃の北支・蒙彊の現況を参考までに述べておこう。

昭和十二年（一九三七）七月七日蘆溝橋事件が突発し、日中戦争の火蓋が切られた。八月八日日軍は早くも北京、天津を占領。この作戦と併行し東条英機を総司令官としてチャハル作戦が展開され八月二十七日張家口を占領、五日後に察南自治政府が成立。十月十七日蒙彊西北の要衝包頭が陥落してその十日後に蒙古連盟自治政府が樹立された。（満洲国はこのとき建国五年目を迎えている）

路郎の京津蒙彊方面への旅は、こうした戦塵いまだ収りやらぬ、日軍占領下一年余の旅で、一地方人が簡単に割り込めるはずのものではない。徳王を盟主とする蒙古連合自治政府が成立したのは、昭和十四年（一九三九）九月一日で、路郎が帰国し一年後に発足するのである。（ハノイを脱出した汪精衛は日本政府と南支新政権について協議中）

路郎がそんな華北・蒙彊への旅は、川雑同人岩崎柳路が一切の面倒をみた。さきの満州・朝鮮の旅も、この柳路が肝入り役であった彼は路郎帰国後は川雑蒙彊支部を作っている張家口に本社をもつ蒙彊新聞社に筆者が赴任したのは昭和十八年であったが、その彼とは再会赴任で殊のほか喜んだ柳路は、盛大な筆者の歓迎宴を張ってくれた。内地直輸入の娘子軍七十人を擁するキャバレー東亜会館（旧名オペラ）を経営し、駐蒙軍や政府の大官要人を手玉にとる柳路は、まさに飛ぶ鳥も落す実勢を満喫中であった。

「わてと路郎師とは川柳を通り越した人間的にも格別な間柄でっさかいな。さきの満鮮旅行も今回の旅も、わてが箸の上げ下ろしまで面倒みてますのや、これがすんで南支の方も落ちついたら、上海あたりへもう一度大名旅行して貰うつもりでいますのんや」

と意気昂然と柳路は自慢のチョビ髭をうごめかして語る。駱駝の体臭溢れるカルガンの輝く陽の下で、なめらかな関西弁を駆使する得意の貌を、筆者はただア然と眺めていた。

大阪—東京—遼源—山海関—北京—張家口—それが彼の大陸経綸のコースであった。路郎と格別の間柄とは、路郎夫婦の長女純子を柳路が預ったということを指すらしい。なぜ

路郎一家がその長女を彼に委託したのか、その事情はくわしくはわからない。

余談だが、川柳雑誌旧刊に北京川柳会に関する雑文を寄せたとき、その会場であるナニワホテルと経営者の和田黙然人にふれた時、その掲載誌の編集後記で

「あのナニワホテルは、私が蒙彊・華北の旅でお世話した建物である」

と路郎は記している。柳路の存在を筆者はそのとき強く意識したのは成行きである。

ともあれ、この柳路との風交は、張家口で応召の赤紙を手にするまでの一年間にわたって続けられた。この間、駐蒙軍の軍医少佐であった小川静観堂（川柳塔同人）と酒席をともにし、山崎小鮎（当時番傘同人・酒販業）と接触した筆者である。

かくて路郎はつつがなく華北・蒙彊の旅を終り十月二十一日帰阪している。その月余の旅について、彼は川雑に〝北支蒙彊の印象〟を執筆。大同石仏の露天仏と路郎を捉えた柳路の写真が、その年の十一月号の表紙を飾っている。（終戦直後この柳路は松乃夫人と着のみ着のままで帰国。大阪市内の上六付近で小さな喫茶店を夫人が経営し、彼はさるキャバレーの一事務員で苦闘をつづけるどん底の海外引揚者だった由だが詳細は不明）

この年は「柳務に多忙」と山雨楼メモにある通り、BKから〝戦線と銃後の川柳〟の放送をはじめ、薬石新報社（大阪）創刊五十周年記念川柳大会で講演と選句。「新川柳評釈」を発刊。北支・蒙彊の旅のあとの帰朝講演。そして「川柳雑誌」が十五周年を記念し菊判から、菊二倍判の大型に改め「全柳界の度胆を抜いた」（山雨楼メモ）のもこの年の新春一月号からであった。そしてこの年の暮には、坂井久良伎古稀記念祝賀として川柳人協会有志による「金二曲屏風」を路郎が贈呈している。

昭和十四年、路郎一家は堺市出島海岸通り二丁目一八二番地へ居を移した。

「玉出から堺みなとへ移ってからは、路郎と私は土佐堀にある川柳雑誌社の事務所へ通勤しました。

この堺みなとの家は、有恒倶楽部川柳部の橋本破夢造さんの御紹介でお借りした家で、細桟の窓障子を右にみて、植込みから玄関にあがると、みがきのかかった廊下が奥庭まで続いているので、一寸料亭のような感じがありました。

階下は茶の間、座敷広い土間のあるお台所と浴室化粧室などもゆったりとしていて、階上は書院体の床ちがい棚のある日本座敷と女中部屋と十畳の洋室、ポンプ井戸のある一間ばかりの幅のたたきは、木戸をへだてて高野槙が周囲に植ってある空地に出られました。戦時とあって子供たちはここへさつま芋を植えたりしました」（霞乃書簡）

「昭和十四年八月十六日渡辺暁童入社、営業部主任。健康すぐれず十二月二十三日退社帰国」（山雨楼メモ）

「渡辺暁童さん（現川柳塔同人）は、堺みなとの家に入ったころ、四国から来て雑誌の仕事を手伝って下さいました。

―**妻も子も無事かと秋の虫にきく**

という暁童さんの句を路郎が見て、国元から奥様とお子達をお呼びして、近くに家をお借りしたこともあったのでしたが、私はほとんど家にいず奥様を訪ねてあげられず、また配給もののお世話もしてあげられなかったのでした。暁童さんも奥様も故郷へ帰る決心をなさいました。今にして思えばその方が暁童さんの将来の為によかったと私は思うています世間なみの常識に欠除していた私は、行き届かないことばかりで申訳がなかったと悔んでいます。しかし、暁童さんのお作は、いまだに共鳴するものが多く楽しんで読んでいますたとえ暫くでも同じ屋根の下で暮らしていたからでしょうか」。（霞乃書簡）

前田雀郎の「せんりゅう」は、このころ名句鑑賞を連載していた。紋太を乱戝、三太郎を未六、周魚を砂人、水府を太郎丸、雀郎を右近がそれぞれ執筆した。路郎は古谷盈光が書いている。昭和十三年の同誌一月号で〝現代名家作品鑑賞―熱情と吐息―麻生路郎氏の名句鑑賞―〟のタイトルによる。往時の路郎の代表句を一瞥する意味で、その本文を以下要約して掲げよう。盈光の句評も味がある。

―**お元日座るところへ座らされ**

新年を一家が寿ぎ、天地の恵みに感謝する気持がよくこの短句の中に渾然と窺われる。

―**酒とろりとろり大空の心かも**

心憎いまでの修練である。時あたかも戦勝の年、遠慮気がねはさらさら無用。

―**だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと**

―**貧しさのながながしくも四十一**

旅人の物さびしき心へ不意に鐘が鳴った。しかし旅の前途はなお遠し、ああと嘆く路郎が目のあたりに見えるのである。そしてこれを「だしぬけに金が要るのも」として、人生苦難の旅を思わじ。後句のいよいよ身を切るような四十一が同情されるではないか。

―**子を死なし学校に子の多いこと**

句主の動静に全くうとい私だが、むしろ知らない方が雑音が入らなくてよい。

―**ひとり居ればひとりは限りなくさびし**

ほそぼそとした佳句である。さりながら、「名を捨てて十七、八の恋もせむ」（これは名句とも佳句とも思わぬ）のような句のあとを承るこの句があるとするなら路郎氏のムラ気を責めると同時に、句の品位も半減するであろう。

―**その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ**

この句に接して一茶の句を思いうかべるのは、ただに私一人ではなかろうと思う。万事を知りつくした人間のあきらめの吐息あり。

―**君見たまへ菠薐草が伸びている**

これはすでに先輩諸師の毀誉交々の評に尽きているので盲評はさし控えておこう。

―**ふと眼をやれば煙突に煙なし**

水瓶に水の絶えたにひとしく、煙突に煙りの絶えた一沫の寂しさを知るものである。わけて童心に返れる詩人のある日の心境は、満たされぬものがあったであろう。無から生れる句とは、この様なものをいうのだろう。

―**お互いの世にせうとしてかどがたち**

ながながしき五十年の間には、一社の主幹として苦心経営もし、或いは熱情ほとばしるままに他を排したこともあるであろうが、しょせんは生物のはかないあがきでしかない。

―**恋の罠あの眼だらうか眼だらうか**

―**時雨れてる銀座に亀屋鶴五郎**

―**二階から降りる音さへマルキスト**

これらの句は、氏の半面を詠えるものであろうが、安直の気があり、あまりぞっとしない。やはり氏は一人静かな瞑想にふけり、門弟諸君のひとしく讃美する詩的稟質をあくまで発揮して貰いたいと念じるものだ。

―**なあちろりこれから秋に親しもう**

この境地を行く氏のうしろ姿をうれしく眺める私である。どこまでもてらわず、地味に親しむ心、この心こそお互に抱きあっている心であろう。

それにしても十数年前に、生田蝶介氏宅に

「カットがどうの　さし絵がどうのと
　日日を繰り返えし年やとるらむ」

という一首があったように思う。路郎氏にして月毎の柳誌刊行に費す労苦はなみなみならぬものがあろうかと愚考する次第であるが、それはあくまで作句精進に対する余力であって欲しいと考えるのはムリであろうか。

―**子沢山僕の枕は何処へいた**

―**天井の低さも知らず子は生れ**

―**子を泳がせて沖の景色は眼に入らず**

余白は尽き様とする。かく詠み来れば、前記学校の句といい、子煩悩の氏がまざまざと映じ、人間路郎が思い起されるではないか。

―**俺に似よおれに似るなと子を思い**

と人の親として最高のなやみを詠ったとっておきの句が路郎氏にはある。十七八の恋をせむ、などとは夢寝にも言えた義理ではなかろう。いつの日か句碑建立の議でも起きた場合は、この句が詮議にのぼるのではあるまいか乱筆深謝。

昭和十四年三月二十五日西日本鉄道川柳大会（尾道駅前松風館）に出席。「旅と川柳」を講演。懐しの郷里とて父母の眠る福禅寺に墓参する。四十年ぶりなり。

昭和十五年、建国二千六百年特集を前線将兵の活字飢饉に「川柳雑誌」大量慰問・不朽洞会委員（任期二年）委員長戸倉普天・委員里十九・白峯・春巣・孤逢・紫香・申仙・六月七日広島大会・大本営跡拝観・宮島回遊一行某人・久米雄・市多楼・柳石・風見卓第二次近衛内閣司法大臣となる。そのかみ「商業の大日本」主幹の際、机を並べた仲なり・九月創刊二〇〇号記念、皇紀二六〇〇年奉祝三越大ホール川柳大会・十一月堺市の婦人団体に「戦時婦人生活確立講演会」に熱弁を揮い笑いのうちに川柳の趣旨を貫徹し好評を博す。ことしはよく働いた。働いて働いて働きぬいた。スリ減るのじゃあないかと東魚、省二両氏が案ずる程働いた。

鈴木　黄

誹風柳多留廿五篇研究

―（十二丁）―

青木迷朗・西原　亮・鈴木　黄
室山三柳・入江　勇・清　博美
八木敬一・紀内恒久・岡田　甫

199　**人がらな四人り一座大ぐらひ**

青木―四人で空腹となれば蹴鞠である。『川柳雑俳用語考』に「『人がらな』と限定的な説明を加えて一層その意を明かにして居る。のみならず一座といふので、何となく鞠場崩れの遊びを思はせるのであるが――鞠場から吉原行といふ類の句が、古川柳に多い事はここに説くまでもなからう――この句は必ずしもそこまで立入らなくても宜いかも知れぬ」とあります。

四ツ人リハ皆がつ〳〵とぜんに付キ　二三・25

品のよい大食四人一座なり　二八・20

室山―蹴鞠のあとの食事。「人がら」と「大ぐらひ」のおかしみに、「四人リ」で蹴鞠を示したまで。

八木―私には吉原行のにおいがする。

紀内―吉原行きまではどうか。

岡田―同感。色気より食気のほう。

200　**おやぢのハ猿むすこのハ猫にあひ**

青木―「猿」は湯女の異称、「猫」は踊り子或は岡場所卑娼の異称。句意は、おやじは湯女に、息子は岡場所の売女にそそのかされて同衾したというのであろうか。そうだとすると、上五・中七の「のハ」は意味深長。甚だ心もとない駄労解。他に適解があろうと思われます。乞御教示。

西原―やはり、堅物親仁に遊蕩息子ではないか。親仁殿は、「見ざる聞かざる云わざる」で、秀吉の出世の如く財を成した。それに対して息子は、猫の如くこっそりと道楽をすると。もっと具体的には、両者が外出するにしても、親父は山王社か新宿の猿寺へ参詣するのに、息子は回向院へというのであろう。

鈴木―両説とも賛と思います。「あの親にしてこの子あり」の様に、ケチンボのくせに好色な親子と考えた方が面白いのではないでしょうか。

室山―どうもはっきりしない。礎稿ご指摘の通り、「のハ」の間に入る名詞が問題で、小半日この句のみに費したが、明解を得ない。

岡田―ハッキリしない句ながら、猿は山王神社の解が一ばん無難。

201　**辻番をたらふくにする妾か兄**

青木―辻番は武家屋敷の町の番人。句意は、

妹が妾となった武家の屋敷で、たら腹馳走になった兄が、土産に貰った酒肴をとがめられた辻番の爺ィに酔っ払った勢でふるまっている図であろう。

西原―別に「とがめられた」わけでもないだろう。辻番を通しておくことが、必要なのである。そして、互いに似合いの者でもある。

妾が兄度々辻番へ酒を買ひ　一六六・26

室山―西原説賛。辻番は妾が兄にしてみればいちばん気安く威張れる相手でもある。第一気楽である。

入江―妾が兄は落馬の名人。そのたびに放れ馬をどこかの辻番（もちろん、一般人でもよい）が捕えると、片鐙貰える慣例があった。それを酒手に一杯やる。

放れ馬両鐙取るふてへやつ　三三・26
はなれ馬のんで辻番はら太鼓　三三・40
辻番ハ鐙で酒を呑んで居る　一三四・5

紀内―入江氏により、「辻番をたらふくにする」必然性がはっきりした。

岡田―同。

202　**奥行と間口の知れるむす子の代**

青木―息子の代になって、大どらの揚句が、粒々辛苦して父祖がきずいた大だなも、ついに人手に渡って、九尺二間の裏だな住いとなったというのであろう。

あの金をとふするのだと息子いひ　九・2
おやのそろばんをむす子ハ破さんする　一二・30

室山―同。息子の人間・人物としての「奥行と間口」も「知れる」わけ。

八木―同。「二代めハざつくはらんにつかいすて」（拾十・29）。

紀内―賛。ちなみに、

おくゆきと間口のしれる三代目　五五・11

という句もある。

岡田―諸説に尽きる。

203　**私義勝手に付と三代目**

青木―「三代目」は、一家を興してから孫の代のこと。一家としては最も大事の時代と見られ、益々興るもこの代からであるが、先ず多くはこの代に潰れると云われる。

句意は、「私儀勝手に付き」とは、書状等に書く極り文句で、父祖からの身代は私のもので、他からの干渉は一さい御無用で、自由気儘にさせて貰うというのであろう。

この結果は大がい、

売家と唐様で書く三代目

と相なる。

室山―同。手紙の極り文句の文句取。

八木―同。二代目の句の次に三代目の句は偶然か？

岡田―自由勝手にさせて貰うのではなく「勝手に付」は現代語でいえば「都合により」に当たる。句は都合により閉店。

204　**いたい事帯と袴で十二両**

青木―霜月十五日の七五三の祝は、男女三歳の初めて髷に結う髪置、男子五歳の袴着、女子七歳の帯解の祝いで、今日でも見られる。衣装を着飾って氏神様にお詣りするのであるが、江戸ではとりわけ赤坂山王、神田明神、芝神明、深川八幡が賑わった。髪置は鎌倉期から存し、袴着も平安期の「栄花物語」などに見えるが、帯解はつけ紐を去ることで、江戸の初期からであるという。

句意は、袴着と帯解が重なっては、親にとって痛手であるという事で、十二両は実際の金額ではなく、五歳と七歳の和で、数のパズルである。何の事かと考えさせるところがこの句のねらい。

帯と袴で呉服屋へ十二両　四九・4

岡田―同。

路郎賞
川柳塔賞
候補作品中間発表

自五十一年五月号
至五十一年八月号

路郎賞候補作品

正本水客

（到着順）

ストというわけにもゆかず種を蒔く　工藤　甲吉
花屋から春の顔して出る男　野坂つき子
欲しいもの何でも買える不仕合せ　松川杜的
本棚に心貧しき書が並び　谷垣　史好
おや生きているやないかと水をやり　遠山　可住
二日酔いしてる息子のたのもしい小林由多香
かくれん坊自分の声が怖くなり　吉田　水車
愛痩せて妻の寝息を聞いている　大路　美幸
何一つ飾るものなき足跡よ　高橋　夕花
眉目秀麗の悪党もありはあり　不二田一三夫
ところてん大きなよろこびなどいらぬ　小出　智子
お世辞だと取ってくれないのに慌て　平田　実男

若本多久志

父はかく生きしか白梅寒に耐え　小浜　牧人
染め替えて羽織は過去を喋らない　岩田美代
争いの嫌な男を牛が好き　鈴木村諷子
信念へ廻り道した日を悔いず　八木　千代
木石と見られ垣悩うたえる　林　露杖
昂ぶりをさとす白髪の二三本　河野　君子
棟梁の音痴最後をしめくくり　高橋　操子
茶碗置く音のまるさや有難し　堀江　正朗
山の高さ知らないままの蟻でいる　若宮武雄
掌に残る居職の温くみ詩にならず　江城修史
茜雲天地を染めて満ち足りる　金井　文秋
白旗をときどき振って雌雄の和　宮西　弥生
一宿一飯恩義なき世のいとわしく　藤井春日

川村好郎

今日を稼ぐ軍手左右の主張ない　若宮　武雄
中とってチップ折れ合う夫婦連れ　傍島静馬
曲り角の蟹に重たい鋏です　嘉数千代香
生々流転蓮の上なる露ひとつ　高杉　鬼遊
細くとも流れておれば川である　吉田圭井堂
染め替えて羽織は過去を喋らない　岩田美代
うぬぼれて自縛の縄を太く綯う　竹中　肖二
一ぴきぐらい蟻にもいよう怠けもの　不二田一三夫
昂ぶりをさとす白髪の二三本　河野　君子
直立の針を女の胸に持つ　小野　克枝
社会との絆を知った救急車　川口　弘生
このあとが恐い男のおもいやり　中村ゆきを

菊沢小松園

市場籠夢が小さくなりました　栃原　静香
染め替えて羽織は過去を喋らない　岩田美代
目撃者になれぬ私にひまがない　大矢　十郎
定年の父の背中を見ていたり　小島　蘭幸
古い日記の蚊が死んでいる一頁　谷垣　史好
今日を積む積木は今日のうちに積む　嘉数千代香
簡単なことだよゴミはゴミ箱へ　大路　美幸
しのび逢う部屋はノックのない世界

てのひらの上のドラマに幕がない　小浜牧人
四捨五人の四捨の悲鳴がきこえぬか　山根白星

橘高薫風

心経をあげて気のすむまで座る　堀江　芳子
遺作展舞妓は年をとらぬまま　仲どんたく
真実はひとつ新聞を膝に置く　中村ゆきを
言論の自由毒消しいらんかね　山内　静水
冬の蠅お前も死期を逃したか　本多　柳志
落魄の父はアルバム見たがらず　傍島　静馬
夢に見た春はも少し暖かし　村上　旭童
花束を抱いても少女に戻れない　川上　大輪
ざるそばを食べて革命など出来ぬ　谷垣史好
あじさいの彩に告白したくなる　野坂つき子
爪を切る女ちかごろ絵にならず　山内　静水
鳥が鳴く方へ振り向く軽い罪　板尾　岳人
堀端にたんぽぽ残る城下町　榊原　秀子
こそばゆいとこに女が残ってた　原田　一風
生き難き死に難き貌檻の鶴　三宅　不朽

西尾栞

天と地と人　嘘つきは人ばかり　工藤　甲吉
曲り角の蟹に重たい鋏です　嘉数千代香
ノーという勇気が厚い壁やぶる　和田維久子
落ち椿夜更けの部屋の耳となる　高杉　鬼遊
もうわき見出来ぬ名残の灯をかざし　中川　滋雀
お互いに檻の中から手を伸ばし　時広　一路
爪を切るテンポに合わせ小言いう　樫谷漫柳
今日を稼ぐ軍手左右の主張ない　若宮　武雄
政治家のみそぎは黒い靴のまま　大路　美幸
札束で買えない自由の地図を描く　宮西弥生
四捨五人の四捨の悲鳴がきこえぬか　山根　白星
金で済まぬ金で済まぬが金ですみ　大矢十郎
霧霽れてやっぱり島も海もある　谷　のぶを
女紋　女としての意地に生き　白岩　文蔵
信号赤　光陰止める赤がない　津田　与史

川柳塔賞候補作品

小浜牧人

先頭に立って冷たい風を切り　青木　仙人
手を合わす老女哀しみこぼさない　松本文子
耐えること慣れて人形の顔をする　松原寿子
昨夜のこと忘れなさいと陽が昇る　小山悠泉
愛称で呼べない程に偉くなり　安田　紘
おふくろと言う愚さに居てたのし　安藤寿美子
溜まる不満で風船をふくらます　江口　渡
端正な男の鬼を見てしまう　納　史葉
若竹のひと節ごとにある気魄　杉浦婦美子
合格は合格同士肩を組み　那須　鎮彦

大坂形水

本当の甘さは塩が知っている　江口　度
大物に病院というかくれみの　欄　蘭
悪女にもなって時にはすくわれる　小谷清女
多角経営の愛に溺れてゆく女　小谷　葉子
若竹のひと節ごとにある気魄　杉浦婦美子
耐えること慣れて人形の顔をする　松原寿子
昼下がり時計をゆるく巻いている　桑原道夫
ニヒリストきれいに魚たべ了える　芝原路春
母の壺泪と汗と梅干と　高橋　古啓
母の日のクレパス偉大な豚を描く　柚木踏草

戸田古方

省略の好きな男で酒を酌ぐ　柚木　踏草
ゴム紐の自由をかこつ妻の愚痴　井上柳五郎
花の山掏摸も一会の人なるや　岩下　照沖
ニヒリストきれいに魚たべ了える　芝原路春
花らっきょ小皿の中を逃げ廻り　藤原世史春
あきかんもねころんでいる春の土手　樫村ふみよ
金婚ともなれば夫婦は空気です　須浦　つね
堀の水アヒル一家が春にする　伊藤　一郎
目が覚めて指動かしてみるひとり　大本バット
本当の甘さは塩が知っている　江口　度

秀句鑑賞

―同人吟―

―前月号から―

尼緑之助

喜びを生活の死角に置き忘れ　中川　滋雀

人間は食うために働くのか「暮らしは楽にならざり」と啄木をして詠嘆させたが、喜びはこんなところにあったと気づいた、そしてさりげなく他にも訴えている。あくせく走り続けた老境の反省、悟りでもあろう。中七で格調を高めている。

自画像の眉のあたりにある迷い
六月の雨に心をあずけおく
こめかみに四五日ひとを許せない　小出　智子

しっかりした心理描写、むだのない表現。特に第三句、女の執念を鋭く表明。

大志抱く蛙大地に出て干ぼし　槇田　英詩

一読ユーモラスだが、次の一瞬微笑は停止する。生きる姿勢に対する模索、そして無常感、これは他人事ではないぞと反省がはねかえって来る。

紫陽花は正直者よ男去る　高杉　鬼遊

紫陽花は多情な花とされている。さて、男は遂に来なくなった。この庭隅に雨にぬれた花が、それ見たことかと言わんばかりに女主人を見ている。一篇のドラマを十七文字に心にくいまでにまとめ上げている。

一組の夫婦が歩く山の峯
山の峯だんだん母の背に似たり　板尾　岳人

山の峯は「我が人生」と置き替えたらよくわかる。作者は「山の峯」を詠んでいるのだが、山を愛する極致は「母の背」に極まっている。作った句ではなく、正に生れた作品。

秋田實先生に勲四等瑞宝章

前人未踏　笑いの台本五千本　不二田一三夫

視吟に類するものは、おへつらい、自己満足に陥りやすく、第三者にしらじらしく映る場合が多い。この句、叙勲の意義を明確に打ち出し、驚嘆と称賛をズバリ詠ったのはいい。

一と思案して水車まわりけり　吉田　水車

往時の水車（みずぐるま）の姿は老年者でないとわからぬのではあるまいか。悠長に廻転する水車、時々停ったかと思われる形態が生ずる。それを「一と思案」と詠み、下五はゆっくり、ゆっくり廻る様子を表現するのに適切。そしてこの作者は自己の足跡を水車に乗せている。

鮎と河豚に似たり母娘の夏姿　原　独仙

宝くじ誰かに当るから並び　森田カズエ

息抜きの場所に本屋を一つ入れ　越智　一水

抱き合うてベンチ二人のものにする　黒川　柴香

機械ならとっくにつぶれる程使い　河井　庸佑

近頃の川柳に「おかし味」が希薄になったと嘆く人が多い。或は否としても、いい点をつけない傾向は否定しがたい。勿論一言で云々するほどの小問題でないので、省略するが四句のユーモアには味がある。

第一句の河豚は「妻」のこと、けなしているようだが愛情はこもっている。夏姿だからこの句は生きている。

秀句鑑賞

―水煙抄―

――前月号から――

香川酔々

無言の朝　紅茶の骸ひきあげる

杉浦婦美子

心に何かひっかかるものがある。そんな朝は、話をするのもけだるくて、ものを言う気になれない。紅茶のパックを引き上げるのもまるで骸を引き上げているようなのだ。すばらしい表現で過去には見られなかったものである。現代川柳の精髄を見るような句である。

燃えるよな赤を着たのは雨のせい

川上　富子

するどい色彩感覚の持主富子さん独壇の句である。雨の日に映える若い女性の赤い服、それは、まさに新緑の候を思わせる。一雨ごとに木々は緑を濃くし、女性は内に秘めたるものを更に燃やし続けるのであろう。

夕凪へ捨てた誰もが知らぬ詩

西山　幸

夏夕方になると、はたと風が止む。海に面した地域特有の夕凪である。瀬戸内地方の夕凪は、とくに有名で、しばしば耐え難い暑さに悩まされるのである。作者の住む和歌山もそうなのであろう。その夕凪のとき、ふと心に浮かんだ詩、人には見せない詩なのだ。作者は黙然として、その詩を捨て去ったのだ。

判らなくても消されてゆく黒板

香川　亜成

$\int \Sigma \frac{\partial z}{\partial x}$。あれあれどうしてあの式から、次の式が出て来るのだろう。考えている間にさっさと消されてしまった。先生はさっと次へ進んでしまう。ああなんと数学は難しいのだろう。夜学の窓には火星が炎えている。

暴走族一人になると泪ぐみ

梅本登美也

この間、暴走族の一人に、インタビューしているニュースを見た。なかなか可愛いらしい少年である。それが、群となって、オートバイを駆使すると、もうそれは野獣の群と化す。自立することのできない少年達、考えようによっては、まことにあわれである。作者の胸に浮かんだ測隠の情なのかも知れない。

新入社白い鳥が腑に落ちず

江口　度

この若者は、暴走族の若者とは一味ちがうすばらしい正義感の持主である。上仕が理不尽なことを言えば、直ちに反論できる直情径行の持主である。この気概を持ち続けてほしいものである。しかし、古参になるに従って白い鳥に慣れていくのであろう。

信号へ父は模範の足となる

那須　鎮彦

生真目な父の生き様が、みごとに表現されている。模範の足とは、うまく言い現わしたものである。やはり作者の普段の努力が、この語を発見したものであろう。

豆腐にもいやな日があり針供養

崎山　美子

豆腐は食品としてこそ値打ちがある。それが、針供養の日には、使い古した縫針をさされる針台にされる。豆腐の身になれば、これほど不本意なことはあるまい。女性しか作れない佳句である。

踊りの輪これより大きくならず過疎

三宅　ろ亭

恒例の盆踊りがはじまる。今年もまた生活の場を求めて、ある一家が、この過疎の地を捨てた。踊りの輪はできたが、去年よりも更に小さくなった。来年はどうなるのだろう。太鼓の音が、淋しく山間いにこだましている。

目印はこれか成るほど小さい家

岸本　無人

おもしろい句です。軽いユーモアが感じられます。目印のポストがなければ、見逃してしまうような小さな家です。でもそれはそれでいいではありませんか。

われのみが病むかの如き便り来る

栗本　藤持

とかく病人はそんなものです。この世の不幸を一身に背負ったような気でいる。でもうまくなぐさめてあげようではありませんか。

川村好郎選

仮説が好きで女は風に恋をする
冷静な構えそこから負けていた
燃え尽きた愛の悲鳴が聞こえぬか
或る決意ふいに歩幅が広くなる
切札があります女強くいる

三重県　川上富子

追い風のペースに自分を見失い
根比べになった親子の平行線
甘やかさないでと孫を預けられ
後戻りするにも棘の続く道
吾れが身に置きかえてみる忌の知らせ

大和高田市　岸本豊平次

さすらい人に同じ笑顔の石地蔵
優しさのあふれるお別れの手紙
反論もしたかろ都会の赤電話
小さな火傷で愛の構想塗りかえる
自叙伝を書けば悪女になりそうで

柏原市　小谷葉子

麻痺の子にかけた十字架誰れの科
麻痺の子の歩幅に母の影が沿い
握らせた造花へ麻痺の手が堅い
麻痺の手にしっかと握る明日の夢
若鮎の無念を竿は知っていず

倉敷市　藤原健二

決断は女が先に握ってる
胸中のほころび縫ってあげたくて
借りている方がシャッキッとして通り
花に酔い女の哀れ閉じ込める
肩書きの重さがやる気へ鞭を打ち

八尾市　田中紀美代

境界線たくみに母です女です
望郷の胸にオンボロバス走る
老木へ斧鉞を払う青写真
ぐるぐると廻る矢印だってある

豊中市　高橋古啓

和歌山市　松原寿子

平手打ちほしい夜空へ亡父を恋う
感激の悪評明日の糧とする
語の端が消えず呂ぶりゆく慕情
満ち足りた笑顔鏡にとらえられ

今治市　原田　緋珈俚

句読点母の小言に見当らず
定年後靴はく父の延長戦
当る矢は放れた時にもう決まり
課長にもなれずコールドゲームだな

和歌山市　西山　幸

無視してる話へ雨の音しきり
素晴らしい出逢いへ過去を皆忘れ
スランプへ追打ちかける古日記
青空に或る日は無限の欲が見え

八尾市　岩崎喜雀

クレーンの腕伸びきって予算切れ
自由とは褒貶の世の外にある
人選の会を重ねる暑さかな
釣人の竿より長き辛抱かな

和歌山市　樫村ふみよ

旅立ちへお守り乗せる朝の膳
庭ぼうきだけが知っている孤独
悪妻であった強さが寡婦に耐え
散る花にふと恍惚の日を想い

新宮市　西尾　功

清濁を呑めず平にて甘んじる
たぎるもの消す石段をかけ上がり

大阪市　新川貞祐

老いさびし匂いの抜けた友ばかり
出好きまで降り込められている梅雨
ときおりはパンより粥を恋う明治

富田林市　中村　優

絶景にお坐りやすと木の根っこ
真実が書けず封書の美辞麗句
大の字で聞く風鈴の涼しさよ

羽曳野市　麻野幽玄

職人と云う一徹を疎く見る
寡婦生態若返る人老ける人
声出して笑い老愁まぎらわす

寝屋川市　江口　度

快調の余勢へ老骨ふと忘れ
くじけそうな心へ父の顔母の顔
枯れ花の落目へ人は近寄らず

東大阪市　崎山美子

見送りをすませば帰りを待つ港
ぶらさげた義理がだんだん重くなり
道端の野草も命かけて咲き

今治市　今井松花

五十円で童心を買う竹とんぼ
びっくり仰天　知事のボーナス

老人の会話仮面が落ちている

河野洋平氏の離党

六人衆期待の目やら敵視の目

旅先は気軽るか総理本音見せ

ネット裏金網邪魔という着り

サングラスはずして主婦の座に戻る

年寄りの自惚れめがねの曇り拭く

嬉しさを押えて何げなく笑い

取りかえしつく青春の後悔記

口ぐせは当ってくだけろと凡人

妻の笛今日も平和な音で鳴る

弁解を男の意地が許さない

よく値切る顔　魚屋に覚えられ

美しく生れらしさのない女

傷受けて響く小さな別れでも

掘りかえす過去に小さな灯は消えず

少年の口笛朝の雲を呼ぶ

雑草も生きる権利の柵を越え

通帳に苦労の汗の指紋つく

今治市　園部正則

西宮市　井上のぼる

大阪市　那須鎮彦

尼崎市　中谷利美

島根県　松本文子

唐津市　岩下照沖

梅雨晴れ間泣きに来た娘の忘れ傘

ゼロが一つ足らぬ官舎の低家賃

心頭滅却物価高騰また涼し

答弁の知事ことさらに低姿勢

カモシカのジャンプ借りたい向う岸

お似合いと勝手に決めて来た写真

目移りがする買物へ待ちつかれ

金で区切りつかない義理がひとつ増え

忙がしさに悲鳴倖せかも知れず

流し雛託す願いに手を合わせ

羽根を得て蟻束の間の夢に酔う

告白をさせぬ先手を打っておく

容れものを褒めて中味にふれはせず

お揃いの湯呑み平等でない話題

三面鏡の一つへ女の嘘をみる

恩の字の消された辞書を売る男

火取り虫俺も死ぬまで舞いつづけ

前例を捜してくれる係官

花の種ほどの夢さえ持っていず

唐津市　三浦ひろ坊

唐津市　田中紫浪

鳥取県　加藤茶人

豊中市　安藤寿美子

滋賀県　柚木踏草

大阪市　芝原路春

見え透いた打算見抜いた目が笑い
東予市　小山悠泉

炎天を行く蟻の列乱すまい

もっと働けとねじ巻く税が来る
鳥取県　福田靖子

長電話女の指が何か書き

広がった野望を妻が危ながり

縫い上げて夜空の星がきれい過ぎ
名古屋市　大林曲ん手

忠告が聞けない耳が二つある

紅白の水引ならばピンと張り

母の夢二度見て母の墓へ来る
西宮市　杉浦婦美子

裏切りよもう浅い瀬は渡れまい

飛翔の里懐古に齢を噛われる

体より口が疲れた女旅
吹田市　藤原世史春

四苦八苦大バーゲンのビラ合戦

庭の隅蜘蛛芸術品を編んでいる

車間距離とった途端に割り込まれ
寝屋川市　香川亜成

パチンコの玉まで逆らう口惜しい日

筆不精ですまない人と会うた帰途
岸和田市　池田香珠夫

渦潮に身を吸いこまれゆくムード

カメラもう持たせてくれぬ忘れ癖
今治市　大本バット

又呉れた名刺肩書上ってる

働いて地味に暮らして居て二号
今治市　真山国彦

ゴネ得のストが始まる起工式

老人風呂パッチ穿くにも坐り込み
今治市　古野伶人

満ち足りて又物足らぬ一人風呂

突然のヒス受け止めた手をさすり
青森県　荒田つる

人工の藻で金魚らもわびしかろ

平行線たどる夫婦も子が五人
堺市　吉田朋子

阿修羅像　茜の色を抱き続け

クーラーを据えてうちわをいとしがり
今治市　蔦本昌道

再婚の打算日銭をさぐり合い

落ちるだけ落ちて根強い根なし草
唐津市　桑原掬治

八十のぐちを漏せず針仕事

ニューモードウインドごとにわが姿
唐津市　田口虹汀

華も葉も根も役立てて蓮は生き

暴れるだけあれてこの風どこで寝る

口下手でよし善人である限り
美唄市　青木仙人

自信ない者あつまってする誹謗
唐津市　山下勝一

雨降って地固らずバスが落ち
七面鳥のよう高官色を変え
倉敷市　高山みどり

丹精をみやげに孫へ鉢洋蘭
思わざる神の給うたジョーゼット
寝屋川市　柴田恵美子

大回転庶務淡々と辞令打つ
一と言が功を奏した日の出番
岡山市　井上柳五郎

隣室から元勲出そうな明治村
城登り殿様の気にとガイドされ
橋本市　岩倉天彦

お隣りの夫婦を褒める妻の意図
ママにパパ叱られているある秘密
兵庫県　高橋近江

失敗の始末は小さく棚へ上げ
思いやる心に従いて来る平和
寝屋川市　福富隆子

嫁にやる財布のデザインあたためる
恋人が出来たか夕食に帰らない
八尾市　田岡千枝

現実に戻りてドラマの眼を冷す
仮縫の時だけお腹引込める
鳥取市　岸本無人

ギリギリの線で女の夏の陣
も一度挑む禁酒を妻笑う
八尾市　納史葉

溜め息を捨てて見給え花の道
そっくりな背中へ挽歌よみがえる
倉敷市　松井俊風

元勲の孫は逮捕で名を高め
セールスにあいそつかした犬眠る
須賀川市　平栗金太郎

里帰り手ぶらで来ては背負って行く
牽牛と織女驚く下界の灯
橿原市　西本保夫

花好きの妻の笑顔もほころびる
見せびらかす事にしている夫婦仲
弘前市　小山内貞男

真実を切る映倫の裁鋏
敗者復活願っても見る五十過ぎ
島根県　飯塚虎秋

過ぎた日を生かし余白を埋めようか
亡妻と嫁くらべることの野暮悟る
大阪市　堀口欣一

サルスベリの花だけ赤い盆の寺

ハスキーな声は勝気というおんな
泉佐野市　大工静子

思い出を拾い上げつつ里の道
悩みごと無責任に宥めおき
鳥取市　勝山紫宏

退院の予定日特に二重丸
禁煙のキッカケ待って居るばかり
八戸市　島田昭治

清濁を飲もうとしたが喉が邪魔
清貧に甘んず古武士の気になって
宝塚市　吉田笑女

部屋中を転げ廻って児は寝付き
実子さえ親の心を波立たせ
岡山県　池田半仙

皆揃う朝餉夕餉に和む日々
激昂もする妻耐えるとこは耐え
竹原市　鈴木かつ子

七色に変るアジサイ何想う
何げなく蒔いた親切喜ばれ
尼崎市　大垣たもつ

締め出して昼寝きめこむ母もおり
ねじ巻いてみても課長補佐止り
羽曳野市　岩橋双虎

砲台の跡観光になる平和
協調は二本に決めた夜の膳
和歌山市　桑原道夫

少女の胸に銀紙の鶴飛べずいる
太陽を飛沫に散らしている若さ
松江市　梅本登美也

大掃除心の窓をふき忘れ
我が家では妻がいつでも白を持つ
大阪市　欄蘭

あじさいと地蔵絵になる町はずれ
不景気に大金落す人も居る
姫路市　大原葉香

ピント合う時には鹿は横を向き
キャバレーを出てラーメンで腹満たし
岸和田市　池田露子

試食品小鳥が食べるほどくれる
主婦の座に慣れてムードは枯れてゆく
山口県　高崎雀声

貧乏な故郷であって美しい
生命をのんだ崖には花が咲き
七尾市　松高秀峰

握る手にライバルと云う目が光り
名乗らずに別れた女美しく
高槻市　山田スミ子

あとくされのないようプラン立て
雑魚同士気が合い飲む話
東大阪市　加藤千代子

子にゆずる何ものも無し母子家庭
島根県　岩田三和

ふるさとの森はわたしとおない年
羽咋市　三宅ろ亭

クリーンだけ売りものにして少数派
東大阪市　浜地清松

キャプテンと呼ばれ財布の紐ゆるむ
大阪市　野田君枝

アルバイト口数多く間に合わず
大阪市　平井露芳

噛じる脛ないから他人のを噛じり
竹原市　大島花炎

雑草をライバルとして挑戦す
堺市　堀畑日々子

子の汗をふきふき離婚調停する
熊本市　有働芳仙

世をすねた目が青空へ突きあたり
岡山市　時末一灯

スプレーで虫の安楽死など思い
北九州市　三上春雄

家計簿の努力を笑う物価高
尾鷲市　渡辺伊津志

今日を生く鴎に明日の海が無い
西宮市　山田喜代子

末っ子の我儘は聞く老夫婦
大阪市　中辻千子

寝不足の孫の子守に手を焼いて
西宮市　朝山千世子

月見草若き日の夢抜けきらず
堺市　栗本藤持

亡き父の匂い嗅ぎたり土用干
広島県　原田篤史

豊年へ月賦が済まぬ稲刈機
備前市　武内雅堂

死ぬという言葉の裏に秘めごとが
唐津市　岩崎實

頃合いをはかって未だ言いそびれ
唐津市　桧垣岩光

金が無いばかりに男の値が下がり
岡山県　柳原孝柳

宣伝になってたばこに火をつける
尼崎市　中塚喜甲

手ぶらでは歩けぬ女の業思う
羽島市　伊藤静枝

明治村日本の夜明けを語りかけ
新潟県　高野不二

父の日だったと新聞見て気づき
橋本市　森脇善彦

天の川奥の間の恋呼んでいる
津山市　木下水保

アイスクリーム高鳴る胸を冷やす気か　松江市　黒目大鳥

子が二人ママは鵜匠の綱さばき　今治市　伊藤一郎　人間の演技貧しい顔つくる

統計の魔術に余生踊らされ　八戸市　安田紘　言い訳はみんな嘘だと母は知り　出雲市　高見鏡堂

夏祭夢は故郷の太鼓打ち　尼崎市　駒村岳麓　よいことが聞けそう風へ耳を向け　堺市　檀野茂子

納涼へあがる花火も散りさだめ　出雲市　板垣夢酔　幸福な女　夫と子供のお守りする　岡山市　西田溥子

空はつづく

吉田水車

戦禍のあとも生々しい昭和二十一年八月十七日、かねて川柳雑誌社の路郎先生からお知らせがあった。ハワイウイロー社の古川麗花麗氏を当地朝日新聞ビルにおたずねした。

氏は当時マッカーサー司令部の軍政官として来名、こちらは終戦早々の夏のことでもありノーネクタイにチビた下駄ばきであったのに対し、氏はたしか米軍のユニホーム姿であったように記憶している。そして何を話したかは覚えていないが、その時の記念のためにとサインまでされた同じウイロー社の古川風竹氏著「川柳忠臣蔵」一冊を頂戴した。

今でもたいせつにして愛誦している。風竹氏は忠臣蔵一件に非常な興味をもたれ、自句四十七句に令弟古川章氏のたくみな柳画と適切な古川柳及び維新以後のものとして剣花坊などの見える句等を添えられまことに見事な出来栄えと申すべきである。

自句四十七句にそれぞれ補足のために付された柳文はさすが文筆の人だけあって軽妙達意のものである。

本年一月、川柳塔社の方々が訪布されたが私は私なりにハワイ柳友各位の思い出があって、みなさんの健康と柳壇の発展を祈っている。

読売新聞から

（51年7月17日付）

川柳塔五八八号から―時事川柳では

「ロッキード狭い日本を掻き回わし」　三宅ろ亭

「財閥に買われピーナツ食う高官」　古川鶴声

「大物に嵌める手錠は小さすぎ」　三浦ひろ坊

に注目した。

「そう言えば腰低くなった商社マン」　大坂形水

「小型だが児玉与士夫が此処にも居」　今井松花

はおもしろい。

本田恵二朗は「心が借りものであったり、ニセものであったとすれば句に迫力が無いばかりか、造花の媚びの域を出ないであろう」という。（池）

百人一首と川柳 (27)

富士野藜男

八四　藤原清輔朝臣

ながらへば又この頃やしのばれむ
　憂しと見し世ぞ今はこひしき
（新古今集）

藤原清輔は、顕輔（七九）の子である。堀河、鳥羽、崇徳の三帝に仕え、正四位下皇太后宮大進兼長門守となり、治承元年（一一七七）七十四才でなくなっている。当時俊成（八三）と並び称された歌人であった。

川柳は、この歌の文句をとって、

長らへばまたこの頃は饅を食ふ
（拾五13）

年明にうしと見し世を恋しかり
鵜肋（一一九1）

うしと見し世ぞ恋敷て引眉毛
憲南（一四〇11）

清輔も袋へいれる鉋屑
木賀（一一八5）

などと詠んでいる。

八五　俊恵（しゅんえ）法師

よもすがら物思う頃は明けやらで
　閨のひまさへつれなかりけり
（千載集）

俊恵法師は、源俊頼（七四）の子であり、経信（七一）の孫にあたる。東大寺の僧であったが、その伝はわからない。自分の家を「歌林苑」と称し、毎月歌の会を催したといわれている。「方丈記」の作者鴨長明は、この人の弟子であった。

川柳は

閨のひまさへつれなきは初会也
横好（四四19）

八六　西行法師

なげけとて月やはものを思はする
　かこち顔なる我がなみだかな

この歌は、「千載集」恋の部に「月前の恋と言へる心を詠める、円位法師」と詞書してのせられている。まだ「円位」と称したころの作である。

百人一首の西行を、川柳は、

かこち顔見かねて定家集へ入
木子（六六5）

さへ渡る月を歎て集に入　木賀（五七18）
百人の中で西行そきらなり　（一一7）
――そきらは粗衣

武士をやめ百人の列に入り　（三〇15）

また文句を取って、

月のまへかこち顔なが売れ残り
（二三20）

かこち顔にてやっといふ月の事
弓也（四九25）

西行へかける無しんのかこち顔

竹成（一一三11）

―吉原月の紋日

西行法師は、左衛門尉康清の子で、俗名を佐藤義清（のりきよ）といい、鳥羽上皇に仕えて北面の武士となり、従五位左衛門尉にまでなったが、保延六年（一一四〇）二十三才で出家した。はじめ円位と号し、のち西行と改めたのである。出家後は、諸国を行脚し、また所々に庵を結んで住んだりした。入寂の処は京都の双林寺とも、河内の弘川寺とも伝えられているが、

願はくば花の下にてわれ死なむ
　そのきさらぎの望月のころ

という自詠の通り、建久元年（一一九〇）二月十六日、七十三才で死んだ。

きさらぎのその望月に西へ行き
　鼠声（二六25）

其きさらぎの望月に西へ行
　玉章（六四26）

西行は廓の桜と見ずに行
　亀成（八一29）

――吉原の桜は三月植える

西行を詠んだ川柳はすこぶる多く、そのうちからすこし拾ってみる。

北向きの武士やめて西へ行き
　糸道（五五6）

官を辞し身は風流に西へ行き
　佃（一一四35）

と出家した時から、行脚の話題、

すり鉢をふせて西行たばこにし
　（拾四10）

西へ行く富士の煙は空に消え
　魚有（七七31）

は富士見西行。

西行の歌で沢の名世にひろし
　花房（八〇26）

冬ならば鴨立つ沢とよむところ
　木賀（九三32）

は鴫立沢。

西行もやろうあたまで一首よみ
　（一二14）

附髪でなみだこぼるる歌をよみ
　玉陶（五五5）

は伊勢参宮。

西行は大尾ねらいは萩でよみ
　斗丸（五七7）

萩の屎集の中へははねこまず
　叶（一一八8）

は萩のハネクソ。

よしや君などと西行理づめ也
　（三三22）

白峰の御廟圓位のかこち顔
　扇松（一四〇8）

は讃岐白峰崇徳廟参拝。

西行は女郎に一度手を合はせ
　一徳（四八25）

西行は初会がへしの歌を取
　亦楽（一〇七29）

は江口の里。

小くら山ねこをなげたもまぜて置き
　（安四義4）

世をすてる外に猫まですてたまひ
　洗路（三一26）

は頼朝にもらった銀猫。

鳶よけの縄が西行気に入らず
　如雀（三一26）

西行が足どめとなる屋根の縄
　芋洗（九一18）

は後徳大寺の屋根。

毎年二月十五日には西行忌が営まれ、

西行忌腰を折るのが手向也
　横好（四四18）

死ぬことのいやな時分に西行忌
　（武六34）

と詠まれている。

愛染帖

正本水客選

身の程を知る時　壺の手が抜ける　大阪市　川口　弘生
赤い色は黒い世界で目立たない　竹原市　三宅　不朽
父としてなにをなせしか子と花火
霧晴れるいのち吹き出すごとく瀧　京都市　松川　杜的
妻の眼の半径に生きてつつがなし
靴べらへかがめばくちなしの匂う朝　富田林市　岩田　美代
送り火にゆっくり追憶遠去かる
血の彩がこんなに透ける無策の手　青森市　工藤　甲吉
平和平和で日本は腐りかけ
核家族反対　西瓜真ん中に　東京都　山根　白星
動く歯に舌は親しきもののうち　和歌山市　沢山　福水
腑に落ちぬ易者ほんとの齢を聞く　今治市　園部　正則
慌てもんやと後輩の死に声うるむ　今治市　原田　一風
鉢巻の数で政治家値を決める　鳥取市　河村　日満
ポッと出た色　あじさいも酒好きか　生駒市　草深　酔升
倒れてもコスモスくの字に起きあがり　小松市　馬場　魚山
崖ぶちにつつじ踏みとどまって咲き　高槻市　若柳　潮花
うたた寝の夢のあと先考える　和歌山市　野村太茂津
全快が天にも届く梅雨晴れ間　大阪市　西出　一栄
あじさいの着道楽にも似ておかし　和歌山市　桑原　道夫
公園のベンチに四季が移りゆく　堺市　高橋千万子
ボーナスの月ですねと定年後　尼崎市　黒川　柴香
断崖の中で生きてる虫もいる　羽曳野市　麻野　幽玄
樹に登る人間　野性に戻ってる　島根県　岩田　三和
長男に一本橋を渡らせる　平田市　久家代仕男
ポックリ死　行事予定に明日がある　和歌山市　西山　幸
井の中の愛の絆へしがみつく　和歌山市　若宮　武雄
自惚れのない人形の性哀し　島根県　小砂　白汀
俯瞰図の中にわたしの土がない　和歌山市　津田　与史
世界は一つと大空がつぶやいた　大阪市　神夏磯道子
夏やせの夫へ笑顔たやすまい　大阪市　神谷凡九郎
じっと眼を閉じたら過去が見えないか　備前市　武内　雅堂
渇いてる女に深い溝ばかり　大和郡山市　森田カズエ
大物の握手　ビデオが確かめる　倉吉市　奥谷　弘朗
還暦をふんぎりにして小役人　倉敷市　小幡　里風
倖せは六十路の坂へ陽が当り　倉敷市　水粉　千翁
勝関を聞いて明日を組み立てる　伊丹市　樫谷　漫柳
風邪に寝た夫婦互に別の夢　今治市　大本バット
立ち読みが忘れていんだ弁当箱　島根県　錦織　文子
甘えて泣いて女　女の武器を持ち　岸和田市　池田香珠夫
風鈴の夜店黙っていて売れる　新宮市　大矢　十郎
真実を語ればどれもいいドラマ　八尾市　大路　美幸
旅に来て山のこころに浸り切る　大阪市　宮尾あいき
物干の落日　私だけのもの

京都市　都倉　求芽

眼があくともう自分の心になっている
貝塚市　野坂つき子

本当の苦労は胸から離さない
東大阪市　竹中　綾女

くちなしの白が眼につく夜の散歩
神戸市　柴田　一掬

子育ての娘に見る妻のありし日よ
西宮市　藤村　〆女

席ゆずる少年はずかしそうに立ち
八尾市　高橋　夕花

いつまでも揺られていたし母の舟
大阪市　小出　智子

どうしても笑うこけしに見えてくる
唐津市　新岡回天子

これだけの人が間違いもなく駅でのり
今治市　今井　松花

ギブスから出して動くか曲げてみる
羽曳野市　岩橋　双虎

野宮の小柴垣だけ見て帰り
唐津市　岩下　照沖

植田から出て足裏の地が固く
岡山県　池田　半仙

感情の壁で真心シャットされ
東大阪市　桑原　喜風

税務署が来るらし机掃除する
和泉市　西岡　洛酔

ある日ふと妻との対話にある平和
唐津市　桧垣　岩光

月だけが浮んでプール夜も更ける
今治市　真山　国彦

面倒くさいか　たまに山彦返事せず
豊中市　高橋　古啓

迷いから醒めると鱗光らない
島根県　堀江　芳子

枷はずす音して自動販売機
和歌山市　松原　寿子

戦争を知らぬ若さへ古賀メロディ
八戸市　島田　昭治

人生を論ぜし友が急逝す
岸和田市　池田　露子

牡丹咲いて老女は残火くすぶらす
東予市　小山　悠泉

失恋と分るピアノをやけに打つ
松江市　梅本登美也

セロテープ貼ってやりたい程喋る
岡山県　直原七面山

天地神明に誓ってなどと大げさな
大阪市　新川　貞祐

一人居の老が子を恋う菜種梅雨
岡山県　柳原　孝柳

内証ごと聞こえた様に寝息たて
唐津市　岩崎　実

留守の子の分まで親は買い求め
大阪市　黒田　真砂

踊り串打たれて鮎はポーズする
唐津市　田口　虹汀

暴力に似たスト丈けはいいと見え
東大阪市　加藤千代子

子の邪魔にならぬ老後は無いものか
羽咋市　三宅　ろ亭

頑迷さ改めず円周を描き続け
堺　市　伏見　茂美

弧をえがく虹に絵の具が負けている
出雲市　高見　鐘堂

幸福な人だと皆が母にいい
八尾市　宮西　弥生

逃亡の男に傷がかくせない
松江市　岡崎　祥月

あじさいが欠伸している天の青
今治市　古野　伶人

汽車走る間は飲んで食べ散らし
今治市　伊藤　一郎

飛行機で石の上にも種を播き
大阪市　神田　秀峰

眼が覚りゃぼやく材料待ちかまえ
東大阪市　竹中　肖二

どたん場の妻を見直す馬鹿力
和歌山市　野村太茂津

俺だけが見える八月の空の戦友
大阪市　西森　花村

手裏剣よりバイク飛びかう伊賀の里
八尾市　香川　酔々

放浪記書くぞ大人になったから
泉大津市　村上　春巳

夏の胃をお茶漬サラサラだましとき
島根県　堀江　正朗

手枕のそばで笑っている枕
唐津市　桑原　掬治

俄雨　波紋の上にまた波紋

▼投句先―〒546大阪市東住吉区湯里町一の二五・正本水客宛（一人三句・**15日締切**）

川柳人から見た ロッキード事件

大きな関心は持っているが、こんな汚たない句をのこすのがイヤだから、川柳人はロッキード事件の作句をあまりしたがらない。しかし事実は事実として、誌上にあらわれた句や、特に作句してもらったのをここに集めて悪い奴らへぶっつけることにした。

マンション経営　橘高薫風

偽証する伊藤・大久保維新の名
小佐野児玉の暗い寒山拾得図
勲一等黒い旭日大綬章

会社員　高杉鬼遊

悪人が飼い主なので外へ吠え
雛壇に確かに悪い奴がいる
情けない男に国が動かされ

源泉税あんたも悪い奴を飼い
ピーナッツ食べたと顔に書いてある

元新聞編集局長　工藤甲吉

トライスター賄賂の音で離陸する
ピーナッツ何ンやお菓子のことでっか

教諭　戸田古方

政治屋の心臓　寒きものよぎる

会社役員　尼緑之助

ロッキードに政府の命とられかけ

主婦　天正千梢

チャンネルを回せばここもロッキード
お見事な角取り王手検察庁
列島改造論隅へ積んどく古本屋

会社員　本多柳志

金の生る木がみな枯れた目白台
最終の頁を汚す立志伝

女医　山川阿茶

政界を黒い翼が飛びまわり
入試なら忘れましたで通りゃせぬ
刑務所の塀から今度は中へ落ち
この夏はいつもとちがう別荘へ
ピーナッツ何処まで転んで行ったやら

高校講師　香川酔々

寝たっきり誉士夫棲んでる羅生門
記憶にはないと河童は皿を撫で

無職　傍島静馬

案の定目白御殿にいた狸
小菅入りしてから馬鹿に気がついた
元首相きょうは獄吏のガード付
灰色高官　黒塗にする漫画

教諭　河井庸佑

白日に曝せピーナッツ食べた奴
黒いピーナッツ今頃苦さこみあげる

商業　大路美幸

逃亡のくらがりピーナツこぼれ落ち
おずおずと額を見つめる越後の子
しばらくは罪人よ聞け瞽女の三味
嘘をつく子はピーナツと仇名され

元教諭　和田維久子

ロッキード今日は烏の啼かぬ日か

商社マン　中村ゆきを

ごきぶりを追う手で高官たたき出し
高官の新聞みんなでの靴で踏み
ピーナツの黒汁　日本地図汚れ

技術家　大峠可動

ピーナツを握る人間貧しくて
ピーナツを握る掌は黙って大きい
ロッキード明日は誰と肩を組む
ロッキード妥協少なき国へ飛ぶ
ロッキード日本は謎々めいている

会社役員　樫谷漫柳

領収証書くからこんなことに成り
拘置所のフトン乾さしたロッキード
高官を乗せて落としたトライスター
ニクソンの豆で田中が後で下痢

雑誌編集　不二田一三夫

政治家に尻っ尾ないのが不思議なり
その日から呼び捨てにする前首相
ここで口　割ったら田中もただの人
軽いかーるい原爆落とした奴よりも

近作

今治市　**月原宵明**

長生きの上に安楽死を願い
水飲んだだけで野良犬石が飛ぶ
茶と生きるお師匠さんの紗は黒し

大洲市　**米澤暁明**

山肌も活きている色白根山
小諸なる古城のほとり句を拾う
藤村の心にふれる千曲川

岐阜市　**市川鱗魚**

お隣りは地主小作の庭続き
七月の暦母には義理ばかり
落ちて住む旧家世間のもどかしさ

東京都　**池口吾歩**

また別の相談があり三次会
栄転の背に飛礫ともなる噂
人来り人去り噂だけ残り

今治市　**長野文庫**

釣自慢場所はどこそこ沖とのみ
易者先ず迷わせてから救いの手
せめてもの慰めまっすぐだった過去

不二田一三夫著（お蔭様であと四十冊になりました）

『川柳寄席』

価・二千円
送・著者負担

序文・秋田實先生

大阪日日新聞―面白く読める「川柳寄席」

川柳作家、漫才作家としても実績のある、不二田一三夫さんが、このほど単行本「川柳寄席」を出版した。
長年、書きためた川柳、漫才台本、随筆などから自選して収録したもの。「台本の負けアドリブへ拍手くる」「芸人の根性テレビでゆがめられ」など、いかにもこの作者らしい視点の川柳。小学生時代のガキ大将が人生幸朗だったという随筆など面白く読める。ちなみに不二田さんは雑誌「漫才」の編集人でもある。

発行所

〒544　大阪市生野区
勝山南1―14―17

漫才作家くらぶ

（本社でもお取次いたします）

川柳への誘い

『西日本の主な吟社』に、川柳塔社が紹介されていないが、これは東京柳界の人たちが編集したからであろうか。内容は一般作家の資料として、又は各吟社の新人指導の教本にも役立つもの。

A5判、一九二頁、上製箱入、定価二三〇〇円、送料二〇〇円、川柳人協会編―一般書店でも発売中。（不）

発行所　東京都世田谷区三軒茶屋二の一九　構造社出版株式会社

握りめし

槇田英詩選

日本のよさしみじみと握りめし　春雄
団らんの風は緑の握りめし　可住
炊き出しへ情けも包む握りめし　春日
買うて来た握りでママの情がない　雅風
被災地へ届く情けの握りめし　悠泉
おふくろの味噛みしめる握りめし　弘朗
にぎりめし半分わけてうわさされ　不二
握りめし津和野の鯉に分けてやり　一風
お握りへいくさの暗い翳よぎり　みのる
握りめし泳げない子が先に食べ　岩光
子の頬がはち切れそうな握りめし　登美也
握りめし古里の味母の味　弘朗
握りめし頬張り語る恋もあり　秀峰
遠足は夫の昼も握りめし　南天
三角のおにぎりも出来世帯馴れ　登美也
老人のお握りお茶に助けられ　正則
被災地で大臣も食う握りめし　重人
水害へ空から届く握りめし　国彦
空き腹の喉につかえた握りめし　バット
年頃の娘へ小さく握るめし　漫柳
去年来たときにもここで握りめし　双虎
それからは蟹も拾わぬ握りめし　本蔭棒
握りめし分けて小さな恋があり　春雄
筍の皮でつつんだ握りめし　弘朗
ピクニック寿司よりうまい握りめし　綾女
梅干の種吹き飛ばす握りめし　一郎
ローソクで食う救援の握りめし　国彦
満腹へ握りめしならまだ入り　本蔭棒
老夫婦札所巡りは握りめし　与史
反省の涙に母の握りめし　優地
ハイキング何は置いても握りめし　代仕男
二あ人で来ればおいしい握りめし　翁童
握りめし童話の世界に生きつづけ　隆子
母病気父のまあるい握りめし　素身郎
握りめしまた戦争のことに触れ　洋々
救援へいの一番の握りめし　優
童心にかえるキャンプの握り飯　芳仙
握りめし日本の味を一握り　紘天
セールスのノルマが重い握りめし　のぼる
二つ目で人心地つくにぎりめし　不二佳
母の手のぬくみが残る握りめし　鐘堂
握りめし失意の村を元気づけ　福水
握りめしと一緒に大志抱いて発ち　洋々
握りめし開けばみどりに染りそう　里風
手から手へ人の善意の握りめし　実人
握りめしこんなにうまい汗を拭く　里風
お握りを食べる母の愛を食べる　度天
握りめし味は神代に続くなり　白水軸
握りめしよくぞ日本に生れけり

備え

宮尾あいき選

現実に備えのもろさ知らされる　紘二
二度までもやられ番犬飼うと決め　軒太楼
インフレに備える策の緩慢さ　正則
外敵へカニに鋏と穴がある　宵明
災難に遭うて備えの知恵が湧き　一風
霧の瀬戸事故に備える警備艇　バット
台風にチャチな備えを笑われる　七面山
万全の備えに一向敵が来ず　漫柳
大雨の度に備えが後手批判　秀峰
爪に灯を点して老後に備えてる　本蔭棒
インフレに老後の備え持ってかれ　同
早々と冬備えする祖父達者　思月
進学へ先ず体力と云う備え　カズエ
進学に備える母の手内職　玉子

老後の備えを託す宝くじ　春雄
嫁ぐ日に備えせっせと貯めさせる　柴宏
六法全書備えてきわどい裏の道　里風
新婚さん先ずステレオを備えつけ　喜代子
消火器に埃がつもる無事な日々　優
山陰の旅に備えて傘を持つ　雅風
目減りした備えを守る靴をはく　無人
定年に備え教習所へ通い　竹馬
過疎に住みいつもかかさぬ常備薬　代仕男
準備した料理がふいになる電話　としよ
来年の芽吹きに備え御礼肥　天彦
痴漢に備え娘の護身術　悠泉
産声へ親馬鹿過ぎる程備え　芳子
備え付けの善意うれしい戻り傘　茶人
暑に備えて夏負けの胃に蝮酒　沖
消防署昼夜別なく待機する　ひろ坊
進学に備え可愛いい貯金箱　のぼる
　佳
花嫁の修業多忙なお茶お花　仙人
大輪を予想七目の竹を副え　右近
銀行の備えのペンに紐があり　敏
ささやかな備えが心豊かにす　翁童
大入りの予想へ予備椅子積み重ね　里風
　人
定年へ備える趣味を温める　肖二
　地
赤ちゃんへもう大学の学資積む　福水
　天
防風林だけが茂って過疎進む　素身郎
　軸
老後の備え孫の入学金に化け

空の旅

小川恒明選

ハネムーン倖せ抱いて発つ羽田　茶人
初めての帰省はり込む空の旅　保夫
新婚にあてられ通しで空の旅　無聖
空の旅母こわいやら嬉しやら　双虎
ビジネスはとんぼ返りの空の旅　木魚
借金をしても空ゆくハネムーン　芳子
時差ボケを笑い合ってる空の旅　本蔭棒
臨時ニュース二の足踏んだ空の旅　里風
空の旅螢すずらん乗せて来る　隆子
空の旅朝のドラマに刺激され　伊津志
空の旅世界廻ったように云い　潮花
世界は一つそんな気がする空の旅　悠泉
空の旅無事お帰りの両陛下　一風
団体の一人となって空の旅　無人
カップルに花束があり空のひと　宵明
英会話の腕だめしなる空の旅　バット
空の旅まだ心臓の静まらず　洛酔
未経験の中の一つは空の旅　七面山
命預けますああ空の旅　与史
空の旅無理にすすめて気にかかり　虹汀
自分の金でない顔ぶれの空の旅　不二
空の旅キャンセルしたい夢をみる　軒太楼
空の旅したしハイジャックは恐し　一風
空の旅心配つめた守り札　翁童
空の旅話題の人はよく眠り　春雄
とまどいもうれしい初の空の旅　重人
空の旅大安の日に乗り合せ　一度
日本地図確認してる空の旅　どんたく
空の旅同じ日付けになる日記　素身郎
ちょっとだけ会ってもみたしハイジャック　掬治
地図帳を飛でるような空の旅　道子
ハイジャック優しかったとインタビュー　芳子
爆音に苦しむ人も空の旅　双虎
空の旅天気予報を信じよう　昌水
空の旅あくまでこばむ妻である　思月
草に寝て流れる雲と旅をする　のぼる
　人
地球儀に思い出残る空の旅　福水
　地
雲ばかり見て居て空の旅終る　国彦
　天
すばらしい地球に尽きる空の旅　可住
　軸
空の旅胸おどらせし日もありき

初歩教室

題 —「母」—

本田恵二朗

肥料をたっぷりと施して、水をたっぷりとやっていたら超スピードで枝葉が伸びて、驚いたり喜んだりしていたら、葉の緑色が普通ではなさそうだなと気付いた。肥料が過ぎて根の方がそれを吸収しかねて疲れてしまったらしい。遂にダウンである。急成長のあわれなる末路を見せつけられた思いである。線香花火の末路に似たところがあるなとも思ったことである。

川柳作家にもこれに似たようなのがあることに出合うとさびしさを感じる。そんな作家になりたくないものである。川柳を身につけねばならない。人生行路に大きくプラスする川柳でありたいものだ。

病魔きて母のゴールを引き寄せる　方子
（病魔の手母のゴールを引き寄せる）　同
母逝きて母の故郷好きになり　同
（母逝きて母の故郷の良さを知り）
おばあちゃんと空の彼方の母を呼び　同
悲喜につけ亡母の愛執去り難く　夢酔
つい辛く挫ける意志へ母まぶた　同
（挫けそうな心に亡母の笑顔浮く）
狙のくぼみに母の詩が泌み　失名
痛いほど母は無言の鞭を持つ　同
（痛いほど無言の鞭をくれる母）
おかあはん達者でなあの墓参り　頼次
（おかあはん達者でなあと墓を撫で）
郷愁の一つに母の握りめし　俊風
母の声どこかにきこえ忍従す　同
（耐え忍べ耐え忍べよと亡母の声）
亡母の味追いかけ追いつき糠の味噌　静江
（亡母の味になっておくれよ糠味噌よ）
忍従の母の残した日記帳　翁童
（耐え抜いた跡を亡母の日記帳にみる）
母の味盗む気らしい里帰えり　同
経を読む八十路の母の声まるく　露杖
母の手の細くも休むこと知らず　同
（休むこと知らぬ老母の手細過ぎる）
平凡な倖せ母と子の昼寝　幸和
和を保つ妥協の姿勢で母は生き
（和に生きる母の姿勢にある温味）
母の膝安心しきって夢を追う　洛酔
母の過去皺の深さにうずもりて　同
（労苦みな皺にうずめて母達者）
母の味をほめて女房気に入らず　功
（母の味ほめたら妻ににらまれた）
やがて嫁く娘へ母なりの嫉妬抱く　紀美代
（嫁く娘へちょつぴり妬くも母ごころ）
母さんに心配させまい嘘さがす　無人
便利さを不自由がった母も逝き　同
（便利さを不自由がった亡母でした）
初出勤母の心の弁当さげ　岳麓
母の味嫁も覚え嫁入りし　同
（母の味身につけ嫁く日を数え）
若き日の父の遺影へ母は老い　紘
（母の老い父の遺影が若過ぎる）
安全運転背中で母の声がする　同
マイホーム母自転車のけいこする　双虎
（前向きの母自転車のけいこする）
子を背負う型のままなる老母の背　大成
（五人の子背負った老母の背のまるく）
母という王座の武器は涙なり　同
（母の座の強さ涙を武器にして）
形見分け母の臭いがする着物　那智子
（形見分け母の体臭抱きしめる）
母の愛子に天秤をかけていず　同
（母性愛を子ら公平に貰い受け）
喪服着た日から女を捨てた母　慶彦
胎動にいつか育む母性愛　同
（胎動に母性の愛が芽吹きそめ）
あれこれと土産詰め込む里の母　江水
母親の諭しが心に生き続け　同
（胸底で母の諭しが生き続け）
母が逝き生家の距離がぐんと伸び　柳五郎
明治生れ婦随の道で生きた母　同
（明治の母婦随の道を生き抜いて）
勿体ないと折箱ですら母捨てず　瓢太
（古折箱母勿体ない勿体ない）
なんぼおこられてもやっぱり母の膝がよい　江水
（おこられてもおこられても母の膝）
巣立ちして小さな母へ便り書く　文子

母さんもおばえがあろうこのラッパ　同
負けぬ気の母がいてこそ日々楽し　日々子
（負けぬ気の母のリードで今日がある）
母の知恵少しずつ出してもらってる　同
（母の知恵小出しに貰う調法さ）
母の位置捕手という役まとめ役　正則
（名捕手ですまとめ役です母の位置）
無口な母で自ら手本見せ　同
（不言実行の見本みたいな母である）
宍道湖の夕陽が好きな亡母でした　鐘堂
羅漢寺の母がこいしい夜は更け　同
（羅漢寺の母を恋う宵星が泣く）
身障児手真似で保母にあまえてる　静子
凧になって覗いてみたい母の星　藤持
小包の重さが過ぎし母の愛　同
（小包の重さに老母の愛を知る）

断崖に立つたび母のふところが　度
（断崖に立つたび母の声を聞く）
暇あれば亡夫と墓にてデートの母　昭治
（老母あわれ亡父の墓石とデートする）
孝行のつもりで老母の愚痴を聞く　同
母偲ぶ白カーネーションも七回忌　貞祐
（カーネーション白く七回忌の母よ）
（カーネーションあくまで白く亡母偲ぶ）
（七回忌カーネーションで母囲む）
亡き母の遺徳は孫への貯金帳　保夫
（貯金帳孫へ遺してくれた亡母）
亡母がいた頃は心が張っていた　同　利美
いみじくも嫁妻母を使い分け
なによりの土産は母へ無事な顔　健二
母の手の荒れが無言の鞭となり　同
風邪の児へ母も一緒に寝かされる　三十四

子の病気直ったでまた叱る母　同
母さんの顔は長生きの相と出る　同
（長生きの相です老母の皺の数）
祖母さんにかかれば母もからっきし　漫柳
結局は云うた分だけくれる母　同
新婚の味噌汁母の味が出ず　サヨ
二人目ができて母の座たしかなり　同
針運ぶその指先は母のもの　同
母偲ぶ宵仏壇へ鶴を折る　伊津志
母さんのことを尋ねる良い社長　同
帰省子へ母いそいそと気を使い　同

題―薬―九月二十日締切（十一月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
本田恵二朗

一分間の柳論

西　いわを

川柳は生涯自分と共に在ると同時に仕事もまた絶えず毎日を歩み続けるのが常道であろう。故麻生路郎師は「足踏みをすな」と諭された。即ち業務に創意工夫と進歩発展がなければ人後に落ちる。川柳にも同じことが云えよう。創造性のない常套句は「足踏み」と同じである。絶えず考え独創を生み出し天職と共に前進し続けることが自分の川柳観であるなお最近ユーモアの句が少なくなって来た感がある。毎年の新年号にユーモア特集が出るがもっと上品なしゃれおかしみに富んだ句が現れないものかと。江戸時代より裃の礼服で育った国民性が未だに拭い切れないものがあるのか。ギスギスした現代社会なればなるほど心の芯から湧き出る哄笑に酔い度いものである。左に豆秋句集より拾ったものを挙げてみる。

こおろぎよ動くな猫が見ているぞ　豆秋
長靴の中で一ぴき蚊が暮し　同
やれやれと安心してる棺の中　同

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二～四
夜間 (762) 四四〇八

第三百二回（五十一年度第八回）

大萬川柳

「強引」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　五百八十句

入選　六十句

強引に口説かれましたと笑う妻　堺　憲祐

細い手で朝顔強引にしがみつき　大阪　あいき

強引にすぎた不首尾と気がつかず　大洲　暁明

強引な金の政治へ天の声　藤井寺　美房

強引に生きる女にカンナの朱　八尾　鬼遊

茶柱へ今日の強引賭けてみる　鳥取　豊生

強引に引受けさされた寄附の額　大阪　誓二

売込みへ社運をかけた強引さ　今治　有里

強引に押され反発出来ぬ義理　和歌山　富子

強引な欲の手かくしている揉み手　和歌山　幸

強引に金借りて来たコップ水　奈良　南天

強引さがうすれた父の身を案じ　大阪　文秋

強引に代役果たし肩が凝り　寝屋川　小路

強引な方へ会議の舵は向き　倉敷　健二

強引が通る男の早合点　守口　笑風

強引な裏にちみつな計算機　岡山　一灯

強引な予算に灰色の影動く　大阪　晴子

強引に飲まして本心さぐる肚　松原　サヨ

強引の裏から我欲覗いてる　和歌山　太茂津

強引な若さに道をあけてやり　岡山　翁童

バイタリティあって強引通用し　大阪　柳信

強引に攻めても定石には勝てず　倉敷　里風

満更でもない強引なプロポーズ　大阪　満津子

強引なプラン予算で痩せてくる　大阪　秀村

強引に押さず女に見くびられ　奈良　本蔭棒

強引な方ねと女もう許し　倉敷　春日

強引な攻めの勝利に詰めが欠け　橋本　恒治

強引に夫唱婦随の日々に暮れ　笠岡　忠三

札束の強引こころを奪えまい　八尾　美幸

和を願うから強引をゆるしとく　東予　悠泉

後押しが居て強引な事が言え　西宮　百酒

仲人が強引すぎてまとまらず　倉敷　素身郎

取立てに似た強引な無心状　富田林　花梢

強引な策でピンチの社を賭ける　神戸　牧人

弱点をかくす強行策に出る　鳥取　静泉

強引な反撃墓穴掘っただけ　八尾　弥生

強引さ買われて労組委員長　鳥取　静泉

強引な夫あやつる手も覚え　大阪　佳句

強引に稼いだ金にない温み　笠岡　忠三

強引に主義を通した日の孤独　和歌山　久子

強引に押せば足元掬われた　今治　宵明

強引を待ってたように恋炎える　大阪　秀村

強引と云われたくない多数決　和歌山　武雄

因習を強引に継ぐ祖母がいて　大阪　君子

強引な男のグラフは明日へ向き　富田林　花梢

強引にいく半生の的ひとつ　橋本　恒治

強引に言うから敬遠されている　笠岡　忠三

強引に押す愛一方からくずれ　鳥取　静泉

強引に押せども壁は動じない　鳥取　静泉

強引さ消えてワンマン案山子めく　神戸　牧人

金がもの言うてはる強引に　大阪　柳宏子

強引に居坐る極め手持っている　神戸　牧人

強引のたのみは義理もつけている　鳥取　静泉

親切が強引となってからの溝　八尾　弥生

強引に押しつけられたただの役　鳥取　日満

強引に打ち込む釘のひんまがり　笠岡　忠三

人ノ句

強引な可決へ陣笠吠えるだけ　和歌山　久子

地ノ句

自惚れている強引なプロポーズ
神戸　牧人

天ノ句

強引に積んだ石垣すぐ崩れ
八尾　美幸

選者吟

強引に慣れ貸付も負けていず

昭和五十一年度
ベストテン（七月現在）

一　美幸　一六、五八尾
二　花梢　一四、五富田林
三　鬼遊　一四、〇八尾
四　牧人　一四、〇神戸
五　百酒　一三、五西宮
六　一二三　一三、五堺
七　好一　一〇、五大阪
八　冨子　一〇、五和歌山
九　静馬　一〇、五宝塚
一〇　小路　九、五寝屋川
一一　君子　九、五大阪
一二　天笑　九、五堺
一三　洋々　九、〇鳥取
一四　道夫　九、〇和歌山
一五　としよ　九、〇和歌山
一六　幸　九、〇和歌山
一七　憲祐　九、〇堺
一八　多久志　八、五西宮
一九　美子　八、五東大阪
二〇　誓二　八、五大阪
二一　静泉　八、五鳥取
二二　維久子　八、五富田林
二三　どんたく　八、〇神戸
二四　翁童　八、〇岡山
二五　古庵　八、〇笠岡
二六　吸江　八、〇藤井寺
二七　弥生　八、〇八尾
二八　あいき　八、〇大阪

以下略

昭和五十一年度第十回
「連　想」　五句以内
締切　九月二十五日

第十一回
「手応え」　五句以内
締切　十月二十五日

○締切を厳守して下さい。

投句先
〒593　堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方　大萬川柳係

岸和田市文化祭参加
第26回市民川柳大会

日時　昭和五十一年十月三日（日曜日）
十二時～十七時

会場　岸和田市民会館地下ホール

柳話　川柳塔社主幹　中島生々庵

兼題
「他　人」
「極　楽」
「余　白」
「偏　る」
「いのち」
「妥　協」

福浦勝晴選
深日白光子選
高杉鬼遊選
松本初太郎選
野村太茂津選
青木三碧選

席題　当日二題発表（兼席各題二句宛）

呈賞　市長賞、議長賞、教育委員会賞、文化協会賞、きーせん賞

締切　十四時（出句は出席者に限ります）

入選句集代　三〇〇円

主催　岸和田川柳会
TEL 〇七二四―二二―六六三二

後援　岸和田市教育委員会
岸和田市文化協会

川柳塔社常任理事会（8月4日）

議題は普及版「旅人」に、傍島静馬氏編の「旅人以後の麻生路郎作品」を追加して、別の意味で鑑賞する「旅人」になる。

その他、今年の大阪文化祭川柳大会は川柳塔社の当番でもあり、川柳塔系の川柳大会が各所で開催されるので選者級は手帳と首っぴきである。

なお「旅人」編集スタッフは薫風編集長をチーフに谷垣史好・高杉鬼遊・香川酔々・板尾岳人・一三夫ときまる。すでにもう仕事にかかっていることもご報告しておく。

出席―多久志・古方・牧人・栞・静馬・庸佑・太茂津・薫風・いわを・形水・小松園・一三夫諸氏。

華道関西未生流家元

籠島総甫

教室　西宮市北口町七ノ九
電話　六七―六二三六

教室　尼崎市武庫庄浅堀
一五七―一八

教室　尼崎市武庫之荘三丁目
一五―一三
武庫之荘文化会
電話（06）四三一―〇七一三

電話（06）四二三―一四五〇

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼中島生々庵主幹は「川柳しなの」一四〇〇号特集へ―辻うらを見てから握りこぶし振る」ほか九句を発表された。

▼高橋掬子さん（本社参事）の句碑が建つ久米田寺には重要文化財として指定されているものが多くあり、特に楠木正成の書状などはよく知られていることである。近くには久米田公園や古墳があるという恵ぐまれた環境にあり、句会場は久米田中学校である。（本誌参照）

▼時の川柳社賞作品募集―創立20周年を記念した作品募集である。雑詠三句（未発表句）投句締切は10月末日、発表は来年2月号。賞8名に楯。投句料三百円、発表誌希望は別に三百円。投句先〒652神戸市兵庫区会下山町三丁目六八・篠原双人方。

▼わたしの白石朝太郎（大野風太郎編）が柳都川柳社から発行。みんなで綴った文章集に薫風・静歩氏も筆を執っている。B5版豪華美本P416。定価二千円送料二百円。新津市本町一丁目七の三九。早目にお申込みください。

▼平安川柳社創立20周年記念全国川柳大会が52年6月5日（日）午前10時～午後7時、会場は京都グランドホテル2階大広間。月を追って徐々に発表していくが企画は雄大である。会費が六千円（昼食・懇親夕餐、記念品を含む）出席は予約が原則で予約金として千円（定額小為替）を同封して52年5月15日まで本社あて申し込む。この場合、会費を五千円（予約金とも）に割引きするとのこと。〒604京都市中京区姉小路柳馬場西入る平安川柳社全国大会係。

▼川柳平安の福永清造氏が出した句集「川柳燈」は初版売り切れ第二版も残りすくないという好評。安くて良い句集はかくのごとし。

▼作句手ほどき（野口北羊氏著）は川柳をはじめる人のために出版されたもの。一部百二十円、送料五十円・岐阜市真砂町七丁目、岐阜川柳社。

▼月刊川柳新聞タブ判P4年間購読料は一六〇〇円・半年九〇〇円（各〒共）発行所〒一九一日野市多摩平一六三の一・川柳新聞社・送金先―振替東京0161541・山本克夫。

▼第21回全国川柳作家年鑑（1976年版、二一〇〇余名参加）A5版¥1700（〒共）〒653神戸市長田区五位ノ池町一の三の一・ふあうすと川柳社（振替口座神戸91106番。

▼51年度文化祭川柳大会・第11回川柳文化賞贈呈式は11月3日午前11時から中央区新富一の一六の八印刷会館で開催。第一部出席者の題は―大臣・竹・助ける・卵・単純・試す・タイミング・束ねる。第二部投句者の題は―対岸・企む・狸・溜る・代表・棚・耐える・高飛車・投句料五百円。10月20日消印有効。投句先及び事務局〒112東京都文京区千石三の三五の三・臼倉寿夫方。主催川柳人協会

▼第25回東北川柳大会は10月3日午前10時から仙台市錦町宮城県婦人会館で開催会費千円（昼食・記念品呈）題―神話・裸・ぎりぎり・高官・裏切り・薬草・乱れ・アクセサリー・炎。席題三題共選・当日10時発表―賞多数。投句9月25日着便投句料三百円（切手可）大会誌希望の方は別に二百五十円。投句と大会の紹介は〒980仙台市東八番丁一七〇後藤方。

▼76年「藍」現代川柳大会が9月5日12時からマルベニ会館3F（福岡市新天町で開催。（投句締切日にまに合わず題は割愛）季刊年四回一五〇〇円、〒810福岡市中央区大宮2の34・泉淳夫。

▼西原亮氏（長岡市）から小生は岡田甫門下のため八月号の石崎柳石さんの一文は特に興味をもって拝読しました。

▼島田兼孝氏（大洲市）から―8月24日に水郷大洲夏の川柳大会を大洲市民会館で開催します。―氏は去る4月5日に「日薬功労賞」を受賞された。（大阪薬専第一回卒業生）

▼**同人の動向**▲

▼尼緑之助氏（出雲市）から、8月22日に中川晃男、藤田軒太楼、石飛水煙三氏還暦祝賀句会を川柳まつえ、いずも川柳会共催で温泉大和紡原生寮で開催、

木次のむらくも、仁多のグループを加え、川柳塔社系だけの水いらずを企画しています。なお山陰中央新報「山陰柳壇」を7月から選を担当された。

▼小西無鬼氏を顧問に、遠山可住氏を会長に「丹波川柳協会」が発足。理事に河原みのる氏ほか。

▼本田恵二朗氏（倉敷市）は「ますかっと」8月号へ「ハワイ漫歩」を執筆された。

▼隠岐不酔氏（姫路市）から―一年間ライオンズ会長を命ぜられ、この六月に無罪放免になりました。また川柳復帰します。ご指導のほどを。

▼遠山可住氏（兵庫県）は51年度兵庫県文化祭・県民川柳大会の選者に。

▼水粉千翁氏（倉敷市）は岡山県第11回文学選奨の川柳審査員に。

▼大路美幸氏（八尾市）は川柳「路」の誌上全国川柳大会で中村富二選に天位獲得―死顔に浮く安心を袈裟切りに―美幸。

▼田垣方大氏（倉敷市）から―去る日老妻と堺の次女三女の嫁ぎ先へ行き、病後初めての旅行でした。浜寺公園に遊び「浜寺の松西風を押し押され」方大。

▼中川晃男氏（松江市）から―このたび保護司として社会のお手伝いをすることになりました。全くの奉仕ですと。

▼不二田一三夫氏は「上方芸能」七月号『芸能ガイダンス』へ〝漫才〟を執筆。文中に酔々・智子・慶之助古啓諸氏の寄席の句を挿入〝喜劇〟の執筆者は松竹新喜劇の座付作者平戸敬二氏という顔ぶれである。

▼故山田季賛氏（高槻市）追悼のため、川柳たけはら八月号は友情特集。静水・不朽・英詩諸氏が執筆。

▼京都塔の会七月二十九日は季賛追悼句会。水客・紫香・潮花・客遊子・白渓子求芽諸氏ほか出席。

▼旅信▲
菊沢小松園氏（大阪市）から―楽しくてアホらしくもありウ舟哉―大八。―鵜の嘴と鵜舟の舳相似たり―蕪風。―ほろ酔いの川風涼し鵜が踊る―牧人。―柳ケ瀬の街へ出たがる岐阜提灯―岳人。―柳ケ瀬ではしご酒楽しい一夜でした―酔夢（7月13日）

▼菊沢小松園氏から―船つき場文化に遠い音で着き―静馬。寄せ書きに祥月・雪美・緑之助・鶴丸・蓮児・独仙・軒太楼・千万子・つき子諸氏（観潮と淡路の旅から）

▼越智一水氏（愛媛県）から―夏期休暇を利用して日本アルプスに登りました―登り坂枯根が観音さんに見え―一水。

▼松下梁水氏（倉敷市）から―川村先生をお迎えして―と寄せ書拝受（川柳せせらぎ社）七月句会。―たましまのここにも育つ柳の芽―好郎。

◇句　会◇

▼**菜の花句会**は9月10日午後6時から西郷会館（八尾神社境内・近鉄大阪線八尾下車南歩一分）会費三百円兼題―河童・雷・狂う・黒

席題二題各題五句以内。投句一句毎に裏面へ雅号。郵券百円、締切当日到着分まで。投句先〒581八尾市高安町北一丁目二五・大路美幸宛。

▼**南海川柳部**は9月16日午後6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は―早発・根回し、小言。

▼**南大阪川柳会**は9月20日午後6時から松崎町大万で開催。題は―真相・エリート・手口・荷物。

▼**川柳東大阪**は9月25日午後6時から東大阪市中央公民館内市民会館二階第二集会室で開催。題は―指・白・冴える・マイク。

▼**たけはら川柳会**主催の第19回近県並びに創立20周年記念川柳大会はいよいよ9月5日（日）午前9時、竹原福祉会館大広間で開催（詳細七月号参照）特別課題「自信」は山内静水選。

▼**故山田季賛氏に8月12日付で勲六等正七位の功労章が授けられた。**

弓削川柳社主催
第28回 西日本川柳大会

日時　51年9月12日（日）午前8時
会場　中央公民館（岡山県久米郡久米南町下弓削）
兼題　「脇役」　中島生々庵選
　　「山」　三条東洋樹選
　　「調査」　榎田柳葉女選
　　「甘い」　大森風来子選
　　「波」　水粉　千翁選
　　「吹く」　長谷川紫光選
席題　3題（出句締切11時30分・各題二句）投句はタテ22cmヨコ4cmの句箋に一句裏面に雅号。**9月6日必着**）投句料五百円（発表誌呈）
投句先　〒709―36　岡山県久米郡久米南町　弓削川柳社。

高橋操子句碑建立

—ちっぽけな善意でもよし心満つ—

川柳塔社参事、高橋操子氏は麻生路郎門下で路郎先生ご在世中は川柳塔の前身「川柳雑誌」社の不朽洞会員として活躍、昭和二十四年四月に岸和田川柳会を創立、現在川柳塔社参事として活躍されている事は周知の通りであります。

また現在岸和田市文化協会副会長として協会創立以来当市の文化向上に寄与せられ特に昭和四十一年社会教育功労表彰をうけられるなど、あわせ句作の精進に励んで居られます事は、私のもっとも敬びとするところであります。（後略）

高橋操子句碑建立委員会
委員長　西出仁三郎

建立地　岸和田市　久米田寺境内

建立時期　昭和五十一年十一月二十三日

協賛金　金壱千円（句主の御意志によりお一人壱千円に限らせて頂きます）

送金先　〒596岸和田市上町七の三六
植山武助
（振替口座・大阪一九六七）

申込期日　昭和五十一年九月十日

（前略）作家高橋操子氏は四十有余年の句作歴史を飾るにふさわしい句碑の建立に賛意を表し、発起人を設立し協賛するものであります。

発起人

麻生路郎夫人　麻生　葭乃
岸和田市長　原　舜
岸和田市教育長　荒木　和雄
岸和田市文化協会長　西出　仁三郎
川柳塔社主幹　中島　生々庵
作家　不二田一三夫
友人代表　玉井　恒清
小倉株式会社社長　小倉　十吾

実行委員

青木三碧・安宅川豊・板尾岳人・榎本聡夢・大矢十郎・太田小栄・岡橋宣介・梶川雄次郎・葛城伊三郎・河内天笑・川村好郎・角谷浩青・上林加仙・菊沢小松園・佐々木莫平・庄司佳生・神藤歌子・新家有雅・須田宏治・杉原芳子・高木武治・垂井千寿子・外山瓢人・富木静芳・内藤きさ子・中田たつを・中村民治郎・中野三四郎・西尾栞・西田柳宏子・野村太茂津・林春栄・林裕子・深日白光子・福浦勝晴・満田彗峰・八木摩天郎・薮年甫・雪本珠子・吉村静一郎・吉村南風郎・吉村たけし・若本多久志・渡辺千恵子・高橋幸代

句碑建立実行委員代表
植山武助

（高橋操子句碑建立記念句会は別項参照）

本社八月句会

会場　金属会館

七日　午後六時

開会前に司会者から、柳話がすめば十分間ほど休憩することが告げられた。これは毎月二百数十句を三十分ほどで選をする選者の負担を少しでも軽くするためである。そして入選句数は四十句ほどを最高にすることも提案された。

栞氏の柳話は、川柳発祥の地は大阪府から大阪市へはいり、そして京都から江戸へ行き江戸で川柳隆盛の足場をつくった。

江戸中期の宝暦、天明の頃の雑俳前句附けの点者柄井川柳（享保三年～寛政二年・七十二歳で没）によってのこされたものを前句を外しても一句で句意のわかるものを呉陵軒可有が「誹諧柳多留」として世にのこした（本誌の古句研究は川柳のふるさとを忘れぬためである）のである。おそらく会場の皆さんは「誹諧柳多留」などの柳書は読んでおられることと思うが敢えて柳話とされた。

今月の月間賞杯は傍島静馬氏に輝いた。

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―庸佑・与呂志・雅風・滋雀・武雄・道夫・潮花・紫香・水客・蘭・一三夫・無聖・古方・柳宏子・静馬・右近・敏・与史・千世子・瓢太・肖二・綾女・一舟・花梢・形水・喜風・誓二・夕花・漫柳・多久志・あいき・文秋・牧人・千万子・吸江・恒明・鬼遊・酔々・川狂子・好郎・正面子・亜成・雀踊子・頂留子・弥生・小松園・栞・度・古啓・酔升・いわを・凡九郎・寿美子・美幸・岳人・一念・野生・〆女・重人・薫風・葉子。

席題「十七八」　板尾　岳人選

十七八そう思わないかんように人は言う　凡九郎
家元は十七八の娘につがせ　潮花
昔から危ない齢の十七八　小松園
禁じられた遊びがほしい十七八　夕花
しやべったら十七八になるグラマー　度
十七八胸に棲みつくひとが出来　牧人
アルバムに老母十七八の高島田　静馬
髭生やす十七八が憎めない　与呂志
十七八真似たら世間広うなり　一舟
花ちぎる十七八の期待感　美幸
十七八スターになるもの堕ちるもの　好郎
十七八世間の裏も見え初め　小松園
十七八朝飯を抜く知恵があり　与史
十七八父の男が許せない　水客
晩成型だと十七八慌てない　誓二
十七八イエスかノーを決めたがり　静馬
母さんの話十七八には触れず　漫柳
十七八親の仕草が気にいらず　酔升
父親を異性と意識しだす頃　多久志
酔うたのが何で悪いと十七八　多久志
美しく十七八は死んで見せ　紫香
十七八花の命をまだ知らず　滋雀
十七八苔は苔なりの花咲かせ　瓢太
十七八の恋は初恋ではなくて　古方
十七八そろそろ嫁の目で見られ　鬼遊
見合いから逃げたも十七八の頃　潮花
十七八もてもてやったと酔うた父　あいき
十七八皆苦しんだ立志伝　右近
法の目に十七八は青二才　度
十七八の夢は地球をせまくする　花梢
かあさんの十七八は戦時中　寿美子
十七八青き礫をもっている　夕花
民話から十七八の娘の匂い　酔々
十七八ある日男に見える父　弥生
十七八花火線香の恋でした　好郎
十七八たのもしがられいやがられ　千万子
哲学書読む十七八は病んでいる　一三夫
十七か八まっすぐな道がある　重人
十七八野党のように反対し　与史
十七八世間に投げる石ひろう　水客
亀の池十七八は信じない　岳人

席題「冷　房」　笠原　吸江選

通りまで冷房効かせ店はひま　好郎
冷房のきかない方へ席を変え　庸佑
這入ってホッと出てホッとする冷房室　右近
冷房にゆだるバーゲンの人いきれ　静馬
冷房の窓団らんの灯かこぼれ　滋雀
冷房の部屋で会議が煮えつまる　肖二
冷房車ばかり混んでる通勤車　蘭
冷房に心頭滅却して昼寝　静馬
冷房のデパートボーナスの汗が落ち　重人

冷房へ背なの仁王がふるえてる　一三夫
冷房のいらぬ我家の住心地　あいき
冷房の部屋でスキヤキ煮えつまる　花梢
冷房の具合を女に聞いてみる　道夫
冷房がなくて求人そっぽ向き　喜風
叱言まだつづく冷房こたえない　好郎
冷房の虜になって義理を欠き　右近
折角の冷房さける故郷の母　一舟
クーラーはないが夕餉の円い膳　好郎
冷房にすっかり冷えたまま別れ　夕花
冷房を出ると確かに夏である　夕花
喫茶店の冷房トイレに効いてない　形水
冷房の下でまともに口説かれる　小松園
クーラーの部屋でさらさら野心なし　酔々
冷房を頑固にこばむ明治者　綾女
冷房の冷気が心にだけあたる　凡九郎
クーラーをつけてないわけをぶっている　寿美子
金の要る話に冷房身にしみる　滋雀
別宅にクーラー宅は我慢の扇風機　静馬
デパートは冷房目当てに小半日　千世子
冷房へ都会が疲れた音をたて　雀踊子
クーラーで冷やすローンを稼ぐ汗　漫柳
冷房が虫竜の勘狂わせる　潮花
クーラーの茶房でデートの腰をすえ　千世子
金借りる話へ冷房利き過ぎる　多久志
冷房の部屋の金魚をほめられず　道夫
冷房の部屋で燃えますレモンティ　鬼遊
冷房のビルの谷間で氷売る　美幸
冷房の真下へ愛のつづき持ってゆく　小松園
冷房を止めて心にふれさせる　花梢
冷房へ人間臭さを消しにくる　雀踊子
冷房を切ってジャスミン匂わせる　水客
冷房の夢ははるけし子沢山　吸江

兼題「縄」　香川　酔々選

ピーナッツ談義肴に縄暖簾　どんたく
縄紋の壺に先祖の知恵を嗅ぎ　どんたく
縄に馴れ縄が見えない愛犬家　弘生
肥満児の縄とび悲壮な姿なり　登美也
子は子なり縄張持って遊んでる　野生
義理の絡んだ腐った縄が断ち切れぬ　牧人
人生の縄を今日の分だけよっておく　凡九郎
縄をなう天使にやさしさなどはない　道夫
ぶら下る縄は悲劇の果の果　小松園
一本の縄に親子の血が通い　小松園
縄の屑までまっかっかの陽に染まる　恒明
オフリミット縄一本に見張りさせ　蘭
母なればこそ縄付きの子も信じ　肖二
警察も縄張りがあり来てくれず　好郎
縄とびに混るおばさん探そうよ　正面子
現場保存縄一本が鉄壁で　寿美子
山開き縄ものりとを聞いている　度
燃えっきた火縄を父は大事がる　美幸
妻の縄くぐり抜けると星がみえ　夕花
汽車の旅昔の縄にある鉄橋　岳人
縄文のかけらを継いでいる推理　滋雀
縄のれん流した汗をとりもどす　敏
母の手の藁は素直に縄になる　雀踊子
縄抜けの箱の暗がり考える　正面子
縄のれん又むなしさがくぐり抜け　古啓
自縄自縛そんな縄なら持っている　凡九郎
悲喜劇をあっさりつなぐ縄をなう　酔々

とき　九月二十三日（祝）
ところ　大阪厚生年金会館
中ホール
創立十周年記念
「奇術の祭典」
正午開演
階下指定席　五〇〇円
階上自由席　二〇〇円
関西奇術教室

兼題「鈍感」　岩本雀踊子選

ワンテンポずらして鈍感あしらわれ　太茂津
鈍感へ内助がかげで知恵を貸し　祥月
鈍感な振りで女の火をかわす　日満
鈍感と言われ鈍感そう思い　軒太楼
鈍感な妻が平和の鐘鳴らす　登美也
鈍感な客にわさびを効かしとく　亜鈍
鈍感な男が積んでいる積木　〆女
大器晩成母は信じてうたがわず　一舟
何もかも知り鈍感なポーズする　寿美子
鈍感な男は明日を考えぬ　与史
ぬけぬけと鈍感年の故にする　野生
鈍感をもう更年期にしてしまい　栞
鈍感が笑いの種を播いている　綾女
鈍感な男の時計早く鳴る　鬼遊
鈍感な男の正直さを買われ　滋雀
鈍感な男ピエロにされている　夕花

鈍感へおとなしい人だなと褒めておき　酔升
鈍感のふりして女逃げている　好郎
鈍感な河童の皿に水がない　肖二
たたみの上では鈍感な猫であり　一三夫
鈍感のある日大物らしく見え　潮花
鈍感な眼が正直に物を見る　紫香
笑われていると鈍感わかりかけ　埋れ火を抱く鈍感に夜が来る　美幸
鈍感でもいいさ敵のない男　恒明
鈍感になれず苦労を買うて来る　頂留子
事勿れ主義とほめとく鈍い感　漫柳
鈍感が慌てぐるりがなおあわて　小松園
鈍感のうしろで焦れる販売機　鬼遊
鈍感な夫婦は指定席を買う　岳人
鈍感も知りつくしてる裏の裏　庸佑
鈍感な愛に絆が細くなる夕　花
家の和を保つ鈍感な母で居る　あいき
鈍感な女に戻る家庭の灯　道夫
鈍感にみえて急所はよくつかみ　吸江
素直さがあり鈍感は愛される　いわを
金魚すくい鈍感そうながわらわれる　寿美子
札束の重さに罪の感鈍る　牧人
鈍感な男を笑うスリの指　雀踊子

兼題「ものさし」　若柳　潮花選

ものさしをあてれば腹が立つばかり　太茂津
着物縫う母は鯨の方が好き　祥月
勘というものさしで見た眼の確か　日満
尺ざしか生んだ国宝の屋根の線　弘生
欲捨ててみたらものさし邪魔になり　弥生
棟梁はメートル尺が気に召さず　どんたく
ものさしで背中かいてる昼下り　一三夫
ものさしが狂い出して来た浪費　いわを
ものさしの目もり苦になるほどに老け　酔升
ベテランのものさし生地を無駄にせぬ　誓二
ものさしで叱るタクトを振るように　正面子
ものさしへ伸びる背丈けが父に似る　雀踊子
ものさしの角すりへらし女老い　武雄
名工と言われセンチは使わない　古啓
親類のものさしに合う嫁がなし　鬼遊
ものさしで確かめないと承知せず　庸佑
ものさしに合わぬ縁談ばかりくる　花梢
心の乱れものさしの手がにぶる　恒明
身勝手なものさし当てて物を見る　凡九郎
ものさしの通りに入園噛み合わず　いわを
又伸びたゆかたの丈のたのもしさ　重人
ものさしを幾つも持って街へ出る　道夫
永年の経験ものさしいらぬ勘　庸佑
法律に逆らいながら鯨尺　一念
ものさしで地球の一角計られる　敏
おばあさんの一尺ざしで足る産衣　正面子
仮縫の後からものさし狂い出し　野生
日曜大工ものさしのせいにする不出来　蘭
ものさしの目が子の伸びをたしかめる　武雄
ものさしのよう点取り虫は歩を運び　川狂子
女社長女の尺度ではかられる　〆女
いらだちを見せてものさしほり出され　紫香
メートルを和裁の母は危なかり　一三夫
色褪せて女系家族のくじら尺　夕花
ものさしへ躾のきびしいすわりだこ　雀踊子
亡き母がまだものさしに生きている　花梢
ものさしのむちも懐し師を囲み　一舟

高橋操子 句碑建立記念句会

日時　昭和51年11月23日（祝日）　午前10時
会場　久米田寺境内（国鉄阪和線久米田駅下車・東へ徒歩10分。
司会　西田柳宏子
柳話　中島生々庵
兼題　「池」　榎本聡夢選
「竹」　梶川雄二郎選
「幕」　川村好郎選
「女」　菊沢小松園選
「石」　西尾　栞選
「菊」　岡橋宣介選
「善意」　八木摩天郎選
「紋付」　若本多久志選
（アイウエオ順）
締切　午後一時（席題なし・各題二句）
呈賞　各題秀句

岸和田川柳会
岸和田市野田町一七五番地
電話 0724(22)6631
〒 五九六

八尾市文化祭市民川柳大会

日　時　十月十一日（祭）正午
場　所　八尾商工会議所三階ホール
兼　題　矢・親・神。民芸。戦。流行
鯛。会う。（席題なし）

ひっそりと母と老いゆく鯨尺　夕花
銀河系をはかる物差など要らぬ　水客
断ち台へ明治の母の鯨尺　潮花

兼題「日　参」　川村　好郎選

賽銭の値上げもせずに日参し　藤持
日参の蝶につれない夏の花　日満
日参の足なら踏絵でも踏める　正面子
日参へ根比べとなった意地　栞
日参の想いつめてるこの素足　頂留子
日参をしてから梅干欲しくなり　無聖
今日はまだ来んなと神様思てはる　凡九郎
日参のオマケ好きになった人　恒明
日参へ執念が出る雨の朝　いわを
日参へかなぐり捨てた自尊心　肖二
母の日参まだ嫁がない娘いる　弥生
日参の母に信じる浄土あり　古啓
日参へ鳩にも顔を覚えられ　蘭
日参のエゴへ神さま横をむき　多久志
日参をしても消えない業を持ち　潮花
職安のドア日参へ重くなり　滋雀
合格へ日参の事は言わずおく　野生
よくよくの事さと日参目で送り　右近
結婚式日参をした顔もせず　与史
日参のかなしみ深き千羽鶴　夕花
日参の朝露を踏む軽い足　牧人
日参は城を築いたその日から　野生
日参から帰り受験の子を叱り　道夫
日参の途中で易を見てもらい　岳人
日参がちと邪魔くさい癒りかけ　雅風
受付から奥を日参まだ知らず　静馬
日参の迷い定期も期限切れ　好郎
（河井庸佑・整理）

七月七日略郎忌句会出席者―与呂志・祥月・雪美・連児・一三夫・道夫・敏・無聖・潮花・水客・紫香・千万子・滋雀・蘭・雀踊子・夕花・恵美子・重人・寿美子・与史・太茂津・きみ・としよ・武雄・薫風・多久志・双虎・古方・明朗・肖二・綾女・眉水・牧人・鶴丸・凡九郎・葛城・文秋・君子・智子・鎮彦・幸代・鬼遊・吸江・十郎・功・酔升・大輪・渓水・喜一・酔々・川狂子・いわを・一舟・作三郎・千梢・維久子・静馬・栞志・小松園・喜風・雅風・緑之助・独仙・柳宏子・百酒・漫柳・庸佑・度・瓢太・一二三・栞・つき子・勝晴・誓二・花梢・弥生・美幸・武助・操子・頂留子・〆女・恒明・岳人・無鬼・生々庵・軒太楼・葉子。

▼おわび―本号初校の出た8月20日夜からダウンし、薫風・史好・鬼遊・酔々・岳人・庸佑諸氏にSOS。智子さんまでわずらわせました。28日の発送日より少し遅れたことをおわび申しあげます。（不二田一三夫）

昭和51年度 大阪文化祭
第28回川柳大会

日　時　11月7日（日）10時開場1時締切
会　場　中央公会堂（3階小集会室）地下鉄「淀屋橋」中之島公園内
講　演　「大阪の史蹟」　大阪市立博物館長　平山敏治郎氏
兼　題　「シンボル」　礒野いさむ選
「妻」　井上淳一郎選
「芝」　三輪　喜正選
「近頃のニュースから」　池内　雅巳選
「幻（まぼろし）」　西尾　栞選
「泡」　永田　帆船選
席　題　当日4題・各題2句・締切1時
出句は出席者に限ります。（兼・席題共、当日会場で受付）
賞　兼・席題の秀句に、府知事・大阪市長、府市教委長から「川柳賞」選者から「選者賞」を贈呈
句集　入選句集代三百円・当日申込受付
主催　大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳たけはら

森井　菁居報

約束を守りとうして疑ぐられ　静　水
木の芽どきけだるさ灸をすえてみる　房　子
怒らない男　一本主義は持つ　蘭　幸
顔のないまま三十が近くなり　文　晴
ギター鳴らして心の隙間埋めている　笑　子
のりちやんとの秘密ママへのプレゼント　愛
土鈴振れば貧しき村の音で鳴る　菁　居
母さん有難う言うて貰える母となり　そのみ
おくれ毛のことさら匂う藤の花　不　朽
年寄りが居って日取りが定まらず　白　狐
団地には団地のサイズ鯉のぼり　政　巳
新緑よ人間くさく生きてやる　寛　子
僕だけの夢が育つよ春の床　文　明
手袋のままの握手に残る悔い　貞　子
親愛なる君で恋人にはあらず　千代美
庶民われキリキリ舞いを得意とす　のばら
嫁ぐ娘の日取りにもふれ紅しようが　紫　光
二重あご夕餉華やぐ誕生日　花　炎
花言葉知らない男が贈る花　一　路
来てうれし帰ればほっとするも孫　かつ子
思い出のコースしなびた妻を連れ　故　季　賛

京都塔の会

松川　杜的報

ラジオ寄席安宿の昼鳴り続け　誠　史
夕陽落ちる速さカメラが追いつけず　紫　香
ひと目には退屈してる本の虫　王　石
はらはらと夏をふり撒く柿の花　求　芽
風鈴の音は遠くで夢を呼び　笛　珠
負け惜み金の事には触れず置く　故　季　賛
終業ベル聞き聞き黒板斜に拭き　白渓子
疑いを知らぬ善人むくわれず　弘　三
信じるは勝手よく効きますと言う　飛　鳥
この汗を信じてくれる妻がおり　拓　美
信じてて女迷いの夜がこわく　潮　花
血統を素直に見せる鼻の型　蘇　堂
整型の鼻で私の城飾る　耕　三
鼻缺けて埴輪は土の香を保つ　水　客
羅漢さまの一人鼻が欠けていた　杜　的

どんぐり川柳会

谷垣　史好報

凡人の決め手は健康だと思い　鎮　彦
故郷の空気が待っている疲れ　弥　生
決め手にならずトカゲの尾が切れる　酔　々
民衆に離れたとこにある決め手　小松園
帰郷して空気の味を噛みしめる　瓢　太
かりそめの恋は空気の抜けたまま　吸　江
6三歩　決め手となった名人位　岳　人
おどり串打たれて鮎がポーズする　真　砂
段違いそんな決め手があったのか　儀　一
ふところの温い男にある決め手　鬼　遊
やりくりも知らず今宵は鮎の膳　千　歩
ふるさとの空気の中にある乳房　美　幸
当選の決め手　団地の浮動票　喜　風
肩書を外すと決め手のない男　修　史
看病が決め手となった玉の輿　重　夫
子を諭す決め手に父は眼鏡を外す　薫　風
水着ショー決め手は胸のふくらみか　いわを
女房は空気と択った時はもういない　好　郎
不便とは言えず空気の旨さほめ　泰
晩酌へ家内のブレーキ強すぎる　万　里
ソフトタッチで云いわたされた左遷　史　好

南大阪川柳会

金井　文秋報

あきらめの心が暮しの中に溶け　雀蹄子
無理やりにあきらめさせて行く月日　頂留子
あきらめてもう食欲をセーブせず　恒　明
あの人をあきらめ切れぬバカな酒　千万子
捨て石で相手の出方みるゆとり　肖　二
相手より自分が悪いと気がつかず　綾　女
お相手が出来ず下戸はサイダーのみ　蘭
裏面工作善人に読みとれず　誓　二
反対の側にも裏金回ってた　凡九郎
浮き草に水の深さなどしらず　君　子
頼られて未熟が負うた深い傷　弘　生
母の面ざしふと深海の彩を見る　あいき
母の悩みの深さをやがて知るだろう　静　香
困った事に何ちも小使持っていず　小松園
独断は社運をかけた受話器持つ　鎮　彦
独断で敷いたレールが曲ってた　智　子
四面楚歌もう独断を許されず　文　秋
独断の返事は逃げ道開けておき　滋　雀
独断でないから肩の荷も軽い　好　一
独断のミスに味方の少なすぎ　喜　風

川柳大阪

児島与呂志報

この奥に神がおわすと穴の中　天　草

覗いても何もなかった人だから　鬼遊
朝風呂の社長ゆったり気を伸ばし　川狂子
景気よい話にウマを合わしてる　甫々路
景気よく掛け値とび交う朝の市　雅巣
不景気を肴にはずむ炉ばた焼　重人
年金で暮す蛇口のしめ具合　栞
虎視眈眈景気の先取りする株屋　撤舟
景気など我関せずのベレー帽　三十四
蛇口から妻のリズムがある平和　笑風
父ちゃんはダフ屋阪神ファンです　秀峰
青雲の大志郷関出でダブ屋　本蔭棒
ダブ屋さんも粋な背広でロングラン　敏
風呂上り仕事の鬼の顔でない　恒明
音痴でも我が家の風呂は遠慮せず　喜酔
景気よい遠い太鼓で過疎はゆれ　鎮彦
景気よい話を土産に貸せと云う　幸生
気まぐれな景気に馴れて慌てない　胡蝶
善と悪心の奥の少年期　与呂志

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

屋台店巨人と阪神飲んでいる　千夢
帰るなり巨人の勝ちと母が言う　松尾
招かれた立場忘れている酒乱　野生
住みなれて初めて招く父と母　秀川
プロポーズ一役買った俄雨　一念
前栽の緑あざやか俄雨　一扇
赤ちようちん早くおいでと俄雨　孝夫
俄雨ドローになるまで降り続け　博泉
物事は落語のようにまろやかに　幸太郎
それからは円満でしたと老夫婦　登
仲人の円満ずくめにだまされず　亜也子
停年に円満退社願う妻　みどり

円満な顔に集まる浮動票　亜成
円満なマスク矛盾が押し込まれ　有一
円満な人に元横綱の顔がある　聖地
円満の限界という塀を立て　常夢
円満な夫婦です空気のように　栄
円満な会だが若い芽が出ない　形水
駅前で女を拾うた俄雨　入仙
円満な人柄庶務の隅で老け　好郎

川柳東大阪　竹中　肖二報

飲んでうとうと優雅な私だっしやろが　古方
うとうとの議員も起って多数決　十止庵
うとうとの鼻をペットに嘗められる　肖二
国道の埃に耐える地蔵尊　湖風
国道のここに美人の居る茶店　鎮彦
国道にいさかい解けた県境　喜風
国道へ出たスピードの風になろ　雀塀子
他人試すつもりで試されてた私　凡九郎
試食した手前やっぱり一つ買い　緩女
あれこれと試してみるが生えぬ髪　誓二
試されたとわかり怒ったことを悔い　文秋
新築へ隣りは塀を高くする　弘生
新築へ孫がハラハラさせに来る　一栄
新築にまた叱られる靴の泥　恒明
新築へ一と間をせめて老の夢　雅風
たこ焼きの味行列が知っている　度
家の味だんだん嫁の色になり　美子
ええとこに慣れてる舌をもてあまし　小松園
仕送りで酒や煙草の味覚え　儀一
この次もあること味をほめておく　三十四

川柳後楽　（岡山県）井上柳五郎報

噂まで買物篭に仕入れて来　昌吾
金離れよすぎて噂の人となり　文平
栄転の蔭に噂がついて来る　廉
新幹線で京の噂がもう届き　佐加恵
団地妻広場の噂の花が咲き　紫峰
噂ほど主人女に持てもせず　雷山
お念仏唱えた口で嘘を云い　幽谷
善人の口が震える小さい嘘　秋月
頷いて苦しい嘘を聞いてやり　胡風
口下手の少しの嘘にどもってる　照路
効能書のような嘘を並べたて　ひろし
ばれぬから嘘がほんとのままにされ　柳五郎
素人の懸命な芸が涙呼ぶ　めくみ
素人とは思えぬ仕事で自惚れる　博友
素人がプロを泣かせる芸を持ち　元一
行詰り素人あつさりかぶと脱き　夏彦
いやいやで出た素人の芸達者　たけ志
お隣りに自慢の寿司を配る妻　恒洋
祭りずし年に一度の豪華振り　定平

川柳塔まつえ　祥月　報

高官が背伸びしすぎてけつまずき　登美也
法は許せど高官民が許さない　巡歩
高官のさすが動かぬ品位あり　みつこ
高官のイメージ変えたロッキード　敏雄
寝不足も肩に生活が重く乗り　みのる
高官も金には弱い綱渡り　雪美
高官にゴルフの誘い遠ざかり　快哉
高官に深夜の客のベルが鳴り　巷雨
高官がもらうと灰色になるピーナツ　鶴丸
良心をねじ伏せ高官生きつづけ　孤呂二
寝不足の目に朝顔の艶がない　遁児
寝不足が集金人への飛ばっちり　町紅

高官この頃睡眠薬の量が増し　晃　男
値上げには馴れてて値上げ痛いこと　祥　月

川柳ささやま　河原みのる報

天国を知らぬ同士が行きたがり　れい子
天国へ満足そうな顔で往き　村　雨
天国か極楽にしようかまだ迷い　みのる
天国の花であれかし少女の死　百合子
雑魚だけの天下になったコップ酒　可住とよ子
雑魚やっと回転椅子にたどりつき　栄光の過去雑魚でのぼった岩恋し　越　山
黒幕に影もうつらぬ雑魚でいる　素　水
雑魚を追う手網だけ持つ税吏です　宗　珠
人生のシグナル青を選り探し　近　江
青虫が街の娘を走らせる　無　鬼
潮時をはずしうるさい人となる　喜美代
落選を潮時でしたと慰める　珠　玉
ロッキード片付くときが潮時か　一　好
令の効ひく潮時が解りかけ　和　人

川柳わかやま　津田　与史報

つつましい祖母を裸にした暑さ　柳宏子
だまされたショック自嘲が消してゆく武　雄
暑かろが寒かろが良し日曜日　十　郎
つめ赤くそめて虚しさ消している　寿　子
よっぽどのショック吸口に火をつけた太茂津
いざこざに触れず日曜の灯が赤い　好　郎
丸裸だから他人の世話もやく　英　子
裸虫やがては蝶になる誇り　和　子
間のびした素顔に出逢う日曜日　幸
少年の恋は真赤に塗ってある　与　史
鈴を振る二人は裸で結婚し　修　一
いつからか赤い血がさめ土を踏む　天　彦
息子の裸亡夫に似て来てハッとする　千寿子
深窓に育って裸の好きな妻　としよ
美しく老いてネクタイ赤が似る　福　水
赤い靴両手にパパとママがいる　道　夫
日曜のあれもこれもが寝てしまい　きみ
日曜だけが生き甲斐かも知れず　光　代
男と男裸でつきあう潔白さ　恒　治
若さえの裸に可能を賭けている　那智子

南海電鉄川柳部（大阪市）辻　圭水報

あてのある番頭一つ積残し　摩天郎
積残しすまない顔もしてくれず　圭　水
積みのこされた箱に位牌や過去帳　小松園
積残しさせぬうしろは七光り　宏　子
積残し伝言板に書いてある　維久子
満員バス僕の前から積残し　季　賛
積み残し倉庫の中で値が上り　清　女
積み残され追うハイヤーの高うつき　千万子
ぐちってもどうにもならぬ積残し　鎮　彦
積残し恐れぬGパン割って入り　雅　風
積み残す路線もあって尚赤字　柳　信
駅員になだめられてる積み残し　誓　二
積み残し押し込むバイト玉の汗　儀　一

和歌山七面句会　中筋　三幸報

宣伝はしませんと言うコマーシャル　幸
空腹へコマーシャルは食べている　知　也
下っ端と云う人生にさからわず　富　子
端金出しそびれてから運が逃げ　寿　子
ユーモアの話の端に胸をさす　光　治
平行線の端の交り信じよう　武　雄
お隣は今繁昌の笑い声　勇　次
誕生日ふくみ笑いの贈り物　凡　夫
ほほ笑みにほほ笑みかえす通勤車　和　美
コマーシャル子等の会話に利用され　礼　三
見わたせば我番号が端にあり　豊　吉
内輪もめバカバカしさに笑い出し　節　子
広告が女の敵とつい知らず　たか子
しあわせを端の人から悟される　ふく代
苦笑い良い勉強をしたと言う　三　幸

三井が丘川柳会　高田　博泉報

友達が出来ておもちやは箱の中　野　生
痛いとこついた友の祝辞聞く　亜　成
病院も住めば都で友ができ　三　郎
友達の甘さが実印捺した罰　一　念
幼友達親にも言えぬぐちを言い　亜也子
友達が変ってしまった十年目　博　泉
自家用へ不遇な友を先に乗せ　亜　鈍
悪友が一番頼りになってくれ　柳宏子

各地10佳選（前月号から）

川口弘生選

振りかえる起伏はいまは懐つかしく　小松園
野仏と静かに旧道の道しるべ　季　賛
子持ち鮎青葉の味が溶けている　水　客
信じると生命線が長くなる　岳　人
人間の素顔を見たり特売場　好　郎
焼いかが午餉が待てないワンカップ　緑之助
親の夢娘の夢今日はデイトです　静　水
精力を水増ししてる老いの意地　与呂志
寝不足の夏の太陽まぶしすぎ　三十四
カス掴んだと女房に惚れている　キ　ミ

病院の隣に住んで医者知らず　てまり
婦長さん大の男をあやしつつ　恵美子
健脚の父退院の足細く　度
病院は今年も脱税のベストテン　加代子
病院に来て病人の多いこと　鬼遊
付添いを寝かしてあげる快復期　三千子
二十四時間白い個室の白い壁　小路
いささかの配当折り込むくらしです　琴音
折り込みの夢物語りマイホーム　牧人
悪友をかばう此の児も父なし子　〆女
病院に斗争の文字血が冷える　薫風

駒つなぎ川柳会　岸　南柳報

現代っ子露店が出るとゆかた着る　茂子
はしやいだ裸おどりが空しい夜　はやを
はしやぐ子に涙も新た通夜の席　潔
切り替えの定期へ銀行粗品呉れ　儀一
底辺に馴れて切りかえ考えず　雅風
切り替えてみても甘い汁がない　恒明
切り替えた頭で不況乗り越える　柳信
凡人の切り替え派手な服を着る　鎮彦
どちらから切り替えたのか仲が良い　綾女
切り替えが出来ずがんこな父でいる　つとむ
大人だけになってチャンネル切り替える　肖二
定年が来ても肩張る癖取れず　小松園

川柳高知（高知市）　川竹　松風報

古タンス妻と生涯生きつづけ　ふじ子
虫の死へ我が生涯の過去探る　マコ
生涯の良き日金婚式祝い　十面子
生涯を仏に過去のある尼僧　茂子
ふしくれた指生涯を土に生き　暁耕
正座して魚の目見える足の裏　あつ子
一生を稼ぐ元気を知る素足　寛
浴衣着た素足がにくい利久下駄　菊野
銭湯の帰り素足の歩をゆるめ　鹿紘
年頃の素足をいやな目で見られ　松風
砂浜を素足で駆ける恋があり　恭章
ジュータンに素足の裏がこそばゆい　芽十
旅人に岬の凪は物足らず　たかし
鈴をふる神へいつわりの筈のなし　窓花
ズボンで来ればよかった岬の風　勝子
日曜の岬を嫁ぐ渡し舟　孤舟
遠洋の基地を岬の灯が守り　天花
船酔いは岬を廻る頃と知る　茂子
岬の灯へ語りかけてる流し釣り　一二三

ハワイ川柳ウイロー社　林　蒼蛇楼報

インカムに屈託もなく酒の味　暁舟
出るおあし低いインカムおっつけず　一つ葉
インカムの不足はラヴで埋め合わせ　秀山
追憶はあのインカムでよくやった　紅渓
インカムに長者まっかな嘘をつき　拝山
内職が本職しのぐよい生活　北海
預金帳ながめて明るいあすがある　万里歩
収入も景気次第で浮き沈み　碉雄
インカムのごまかしさせぬ眼が光り　公女
月給日両手にあまる子が迎え　快夢起
インカムは息子に任せ花いじり　河舟
所得の多寡より自由の椅子選び　風影
足るを知りチャインカム苦にならず　カロ
物価高インカムだけがもとのまま　小雪
インカムの誘惑迷う人の道　蒼蛇楼
増給のチエッキに頬がちとゆるみ　十吉
インカムの額差で人の値ぶみされ　草海

第十回　東大阪市文化祭参加

第四回　川柳大会

一、**日　時**　昭和五十一年十月十日（体育の日）正午開場、出句〆切一時半

一、**会　場**　東大阪市中央公民館二階　視聴覚教室
（近鉄永和駅すぐ南、市民会館内）

一、**柳　話**　「小児科医の漫談」
川柳塔社・主幹　中島生々庵氏

一、**兼題及選者**（選者・雅号イロハ順）
声　西村　芳川氏
余暇　西田柳宏子氏
寺　片岡つとむ氏
似る　橋本　言也氏
鳩尾（ミゾオチ）菊沢小松園氏
駅　墨　作二郎氏
愛　岩井　三窓氏
癖　西尾　栞氏

一、**席　題**　二題（題は当日発表）
堀江としを氏・竹中肖二選

一、**出　句**　兼・席題共各題二句以内（〆切一時半厳守）出句は出席者に限ります。（当日会場で受付）

一、**賞**　各題最優秀句に東大阪市長その他の賞状及び副賞を贈呈します

一、**会　費**　五百円也（呈記念品及び大会句報）

一、**懇親会**　千円也

主催　東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会
後援　東大阪市・東大阪市教育委員会

餘分の儲け貯めて楽しい旅をする　蒼生

大田川柳会　藤田軒太楼報

戸締りをあけて呼込う夜の風　嘉水
暮の負けを返しに行けば戸が締り　軒太楼
娘を許す相手に親は背中向け　ゆう子
許された試歩が嬉しい花の下　三三男
許すとは言わず二人共無事か　緑之助
口裁判梅雨のごとくに押しやられ　胡秋
黒い霧梅雨空のもと晴れもせず　水煙
長雨に殿様蛙の面構え　ハル
部屋に乾す襦袢の下を潜る梅雨　雷音坊
目平の山を隠して梅雨晴れず　休二郎
血のにじむ努力を他人は運をいう　虎秋
運命の大きさ知った終戦日　秀子

虹川柳倶楽部（唐津）　新岡回天子報

日本人乗っていませんハイジヤック　五木
地下街の火災に備え不意のベル　照沖
ベルト締め青ざめている乱気流　広坊
空の旅空港まで待が時間食い　実
玄海の鯛東京へ空を飛び　岩光
口紅の濃くておにぎりかじりかね　桑原
方円の器にも慣れ郷に住み　一竿
子の孝養嬉しく受けて空の旅　畑中
にぎり飯塩の辛さも母の味　早苗
空の旅空港持たぬ県を立ち　三日造
名門に備えて附属幼稚園　久隆
空の旅終えて白鳥湖に遊ぶ　紫浪
空の旅むりに進めて気にかかり　虹河
主任制俺がなる番とも言えず　回天子

鳴門観潮吟行句会　野坂つき子報

一泊で帰る娘どうにかやっている　緑之助
一泊に淡路の夢を持ち帰り　祥月
赤潮や通う千鳥の声聞かず　遥児
スクリューの渦快調な船の旅　独仙
捨て石に甘んじ渦中に身を任せ　軒太楼
人形もストレスおこす梅雨のカビ　雪美
憧れの人が三面記事になり　小松園
海見える兵に漁師の墓眠る　静馬
自白して女は渦の外にいる　千万子
憧れの女は結婚してはった　鶴丸
指人形哀しい恋は語らない　つき子

城北川柳会　川口弘生報

先祖の名時には重くのしかかり　右近
先祖から伝ったのは家紋だけ　満津子
御先祖へお経が日課になった母　道子
先祖にはすまないこんな私です　喜代子
ほんとかな人の先祖は猿と云う　千子
落ちぶれて先祖にすまぬ事ばかり　ますえ
御先祖に炊きたての飯お茶もそえ　隼人
出稼ぎも盆には先祖の墓参り　一休
過疎の地に先祖いますと父母去らず　つね
籬ふえて先祖に聞いてもらう愚痴　玉子
二分の一の倍数になる先祖の血　弘生
有難さ故郷はなれて増す先祖　晴子
墓参りすれば短かい人命よ　秀村
先祖様よく見ておくれ俺の腕　恒治
一と味を小指で試す母の智恵　茶々坊
黒髪に染めて嬉しい金婚式　炉斉
寝不足同士居眠りしてる通勤車　三十四
強引の嘘は瞼を伏せたまま　美幸

雅号ぶっちゃけばなし（152）

松下梁水（まつしたりょうすい）

昭和四十二年初句会、川柳の川の字も知らない私が友人に連れられて出席した。その席上、世話係から「柳号を」と言われとっさに思いついたのが現在の雅号である。それは、亡父の竹号（尺八）が梁山であり、私の出身地が岡山県高梁市で、岡山三大河川の一つ高梁川の偉大さにもあやかりたいという意味もあった。

「また替えるかも知れませんから。」と、断ってから今日までそのまま、最近では川柳に関係のない友人達まで雅号で呼んでくれ、郵便物も本名では時々誤配されるが、雅号では真直ぐ届くというハプニングもあり、満更でもないと自惚れている次第です。

職業　会社員（住友重機械勤務）（年令四十二歳）

残暑お見舞い申しあげます

本社川柳忌句会

日時　九月七日（火）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話 271・3935番
柳話　若本多久志（今月の出題・高杉鬼遊）
兼題　「バス（車）」西田柳宏子選
「森」西いわを選
「かぼちや」黒川紫香選
「結ぶ」大坂形水選
席題　二題当日発表
各題三句以内厳守
会費　三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

10月の兼題　［祝　電］［本　社］
［拍　手］［抜　群］

募集

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「大都市」桑原喜風選
「米」横山一声選
「秋晴れ」西森花村選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「借金」大路美幸選
「忙わしい」天正千楢選
「キリスト」谷垣史好選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一人の遅稿　大ぜい困る

10月句会は　3日（日）
11月句会は　8日（月）
12月句会は　7日（火）

お願い！

同人費や購読費は早目にご送金ください。
ご送金がないと送本を中止いたします。
ご協力のほどお願い申し上げます。

川柳塔社運営部

定価　三百五十円（送料29円）
半年分　二千二百五十円（送料共）
一年分　四千二百円（送料共）
昭和五十一年八月二十五日印刷
昭和五十一年九月一日発行
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
郵便番号　542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

時事もの特集の弁

★ロッキード事件を特集した。本誌は右でも左でもないことをことわっておく。川柳人がこの事件をどのような目でとらえたか、一応活字にしておくのも無意味ではないと思った。

★オリンピック・モントリオール大会も、政治臭い聖火が燃える中でとにかくおわったが、〝金〟勘定はどうだったか。オリンピックは参加することに意義があるというが、〝金〟を奪うことに意義があると正直に云ってしまうほうがさわやかだ。勝負は勝つことに意義があり、勝つことによって〝新記録〟が生まれるのだから、参加する以上、勝たなきゃウソだ。その勝つために、〝体操〟などの採点法に〝金〟につながる政治が顔を出さなければいいが、四年後のモスクワ大会を今から心配しているむきもあるようだ。

アリナミンA
お役だていただくために タケダ
肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB_1補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆1日、1～4錠を、1～3回に分けて服用してください。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆25ミリ錠のほかに5ミリ錠。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

おもしろくない後記

★よそ様のことは書かない主義だから、自分のことになるが、後記にはみんな頭を痛めている。書く以上は読んでもらいたいし、かと云って、読んでもらっておもしろいものは書けない。ヘタなことを云ってツキ上げを食わないか、と、そんな心配があるからだ。ある俳誌の後記で、誤字のことや、原稿の遅れ、または規定違反などをこっぴどく書いていた。柳誌であんなことを書いたら大変なことになるだろうと思った。―ぼくの場合、原稿の遅れや、規定違反など編集担当者の宿命だと思っているので、もう腹を立てることは忘れてしまった。ただどんな悪条件でも発行日だけ守らされるのはつらい。うちは、「誹風柳多留廿五篇研究」や「麻生路郎物語」「百人一首と川柳」などの原稿を数カ月前にいただいているので、この点は諸先生に感謝している。

★こんなおもしろくない後記でも、二度も三度も書き直す場合がある。書いて稿料をいただくものを書き直したことがないのに。

★個人誌で、主宰者で、そんな身分で書く後記なら、だれに遠慮気がねもなく、天下に号令ができる。ぼくも若い頃、そんな唯我独尊気分を味わったことがあった。だがその頃は勉強もしたし努力もした。いまはダメ。

★勉強といえば、この頃の人は勉強をしなくなったようである。遊ぶ場が多すぎるのか、勉強して偉くなるご時世ではなくなったからかどっちかであろう。やっぱり政治が悪いのかな。

★そろそろ紙数も尽きるので、このおもしろくない後記のまとめをしなければならないが、本号校正中にダウン。急遽、編集部の諸氏へSOS。こんなことは初めて。

（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼「文字の下手なのはラブレターを書かなかったからだろう」と、薫風さんが発送の日に私をからかわれました。文章、文字に今もって苦しんでおりますのは、確かにそのせいかもしれません。

▼そんな私に不二田さんは折りにふれて、文字の使い方や、文章の書き方等、いろいろ教えて下さいます。

▼今なら上手なラブレターが書けるかもしれません。

川柳塔社同人のシンボル・マーク
女性作家のもあります
一個千百円（送料共）

●川柳塔社同人句集●
『川柳塔』
頒価 1500円　送料 200円

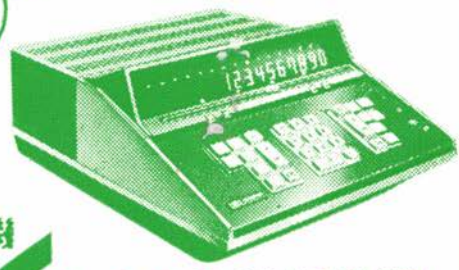
昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十一年八月二十五日印刷
昭和五十一年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年通巻五九二号

川柳塔

九月号

定価　三百五十円（送料二十九円）

タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式卓上計算機
サコム
SACOM

見やすい設計　ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社

HORAI
551
蓬莱商品の目印
アイスキャンデー
あずき・パイン・ミルク・チョコ
ソフトクリーム
バニラ・ミックス・チョコ

蓬莱
大阪・なんば
《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店